
ウルトラマンサーガ LYRICAL

AGIT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンサーガ LYRICAL

【Nコード】

N8351Y

【作者名】

AGIT

【あらすじ】

タイトル変更。

とある世界の宇宙、新たらしい光が修行を終え戦う理由を見付けなるべく飛び立ったがある怪獣と戦い地球へ向かう途中に行方不明となつてしまった。

同じ頃、火星では人類の宇宙への進出をよしとは思わない生命体の襲撃を受けたが一人の青年が光へと変わり戦い始めた。

地球では生態系を変えようとする光のウィルスが現れ怪獣達を凶暴化させていくが一人の心優しい青年と光が再会し共に怪獣達を救う

為に戦う。

行方不明となった新しい光は別世界へ飛ばされていたのを誰も知らなかった……

ウルトラマンサーガ LYRICAL、始まります。

STAGE 01【新しい光】（前書き）

プロローグ的な話です、書き始めたのはリリゼロが止まっているのとサーガの記念にという事も。

登場怪獣

有効珍獣ピグモン

四次元怪獣ブルトン

ビースト・ザ・ワン・ベルゼブア

登場

STAGE 01【新しい光】

ここはK76星という惑星、ここは強力な磁気嵐に包まれた過酷な環境の星である。

その惑星で二人の巨人が戦っていた、一人は赤い体に胸に青く輝くクリスタル、腹部に何かのマークが描かれ頭がまるで獅子のような形をし二つのオレンジに光る眼を持った巨人、

もう一人は上半身と頭を鎧と仮面で包み下半身は赤く、銀色と青いラインが流れる巨人だった。

「オラアアアッ！」

鎧を纏う巨人は赤い巨人に飛び上がり飛び蹴りを繰り返すがその足を掴まれ。

「甘い！」

「なっ…………ぐわあっ!？」

そのまま地面に叩き付けられ踏み付けられそうになるが足を上げてぶつけその衝撃で後ろへ滑り飛び跳ねて立ち上がる。

「まだまだあ！」

鎧の巨人は左手を前に伸ばし手の平を広げる構えを取る。

「さあ来い！」

赤い巨人は鎧の巨人と鏡写しにしたような構えを取る、それは赤い巨人の構えを鎧の巨人が真似たものだった。

「あ？」

足下を見るとそこには赤く小さな体の生物がいた。

「ピグゥ」

「危ねえぞ、下がってるよ」

その小さな生物に注意すると高くジャンプしパンチを食らわせようと拳を前に向け落下する。

赤い巨人は拳を後ろへ引いて鎧の巨人を迎え撃とうとする。

「ハイヤアアーツ！！」

「ゼアアアーツ！！」

赤い巨人は拳を突き出し鎧の巨人の拳とぶつけ合った、強い衝撃が起き地面は揺れる。

「くっ！」

「グウウウーツ！」

両者は滑るように後ろへ下がる、距離が十分離れた所で両者は高くジャンプし飛び蹴りの体勢に、だがそれはただのキックではなく突き出している足に炎が纏った強力なキックだった。

「ゼヤアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」
「ハイヤアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

大きな気合いを入れた声を上げて突撃、両者のキックは激突し先ほどのパンチよりも強い衝撃が惑星もろとも大きく揺らした、両者は大きく吹き飛ぶ、上手く着地するが鎧の巨人は何かに気付き走りだす、向かっていたのは巨大な岩山だった、衝撃が影響し岩山のとっぺんから大きな岩が落下、その下にはさっきの小さな生物が、このままでは下敷きになってしまふと思いきや、鎧の巨人は前屈みになり背中で岩を受け小さな生物を守った。

「危ねえから退いてろって言っただろうが」

岩を自分の後ろに落とすと赤い巨人の方を向く。

「さあ、続き始めようぜ」

だが赤い巨人は「そこまでだ」と続きを始めようとはしなかった。

「どうしてだレオ！」

鎧の巨人は赤い巨人の名を叫び問い質した、自分は彼と決着をちゃんと付けたい、そう考えていたからだ、負けるのは悔しいが中途半端で終わらせるのに納得がいかなかった。

「お前はその小さき命を守った」
「それがどうしたんだ？」

「しょうがないから聞いてやる」、話が終わったら戦いの続き、特

訓の続きをしようと考えていたがその考えは次の言葉で掻き消された。

「お前はセブンと同じ事をしたんだ」

「セブンと………！」

鎧の巨人はかつて自分の故郷の星、M78星雲光の国で罪を犯した、その星で最大の罪を、そのためこの辺境の惑星に連れてこられ、目の前にいる赤い巨人、ウルトラマンレオの特訓を受けていた、その罪を犯した曲がった心を。

だがその罪は未遂で終わっている、それを止めた者がいたのだ、その名はウルトラセブンである、もし鎧の彼が罪を犯していたら今よりもっと過酷な処罰を受けていた、もし犯してたらこのように特訓も受けさせ更正するチャンスも与えてくれなかっただろう。

そこにマントを付けた銀色の赤い眼の巨人とレオに似た巨人が降り立つ。

「アストラにキング………！」

レオに似た巨人の名はアストラ、レオの実の弟である、マントの銀色の巨人はウルトラマンキング、伝説の巨人と称されている。

「覚えているか？ お前が光の国を追放された時の事を」

「思い出したくもねーよ」

外方を向く、それほど罪を犯した、未遂でも重い罪だと分かっているからだ。

「レオも言った通りセブンはお前と同じ事をした、その小さき命を救うと同じ事を」

鎧の彼が犯した罪、それは光の国にあるプラズマスパークタワーという施設の人工太陽プラズマスパークに手を出そうとし、未遂に終わった、手を出そうとした理由はもつと強くなるためだ、その為に罪人となりこうして修行を受けていた。

プラズマスパークの力は強力でもし手にしたら力が制御できなくなり命はなかったかもしれない。

「“ゼロ”……………俺が教えられる事は全て教えた、後は自分で見付けるんだ」

「自分で」、呟くと考え込む、先ほどの荒々しい雰囲気と代わり落ち着いてきたのだ。

「その為にもお前は地球に行け」

地球……………緑が豊かな星でかつての光の国の環境に酷似している惑星と鎧の彼、“ゼロ”は聞いていた。

「地球に……………」

「ウルトラの父からは許可は取ってある、当分の間は自由の身だ、だがそれは執行猶予だ、その間にお前がまた罪を犯すような事があればもうお前を“ベリアル”と同じ処罰をしなければならない」

“ベリアル”、“ゼロ”と同じようにプラズマスパークに手を出し完全に力に呑み込まれ邪悪な宇宙人レイブラッドに力を与えられ悪のウルトラマンとなり光の国を襲撃したがキングの手により宇宙牢獄という施設に監禁され光の国の衛星軌道上を漂っている。

ウルトラの父とは光の国を中心に設立された宇宙警備隊の大隊長である。

「ああ……………分かったぜ」

了承した、自由の身になれるなら本望、更には地球に行けばもつと強い者がいるのではないかという好奇心に満ち溢れていたがキング達は地球でそういう強い者と戦い勝つ以外の戦う理由を見付けて欲しい、そういう考えがあり送るのだ。

「この鎧はその為に外すぞ」

キングは手を掲げると“ゼロ”を纏っていた力を制限する鎧、テクターギアの鍵を外した。

「さあ行けゼロ、ウルトラマンゼロ」

キングは腕を上へ挙げ“ゼロ”は高速で飛び立つと同時にテクターギアを脱ぎ捨てた。

「アイツ……………鎧ぐらいはちゃんと片付けてから行けよ」

アストラはぼやいていたがレオは「それがアイツらしい」と片付けた。

空を見上げていると緑の光が一気にこの惑星から出ていった、小さな生物ピグモンは手を振り見送るのだった。

緑の光を纏い、頭に二本のブーメランを装着し額に丸い緑のランプに二つの薄いオレンジ、黄色いに近い光で輝く二つの眼、テクターギアで隠れていた上半身は露出し青い体が見え銀色のプロテクターに胸に青く輝くクリスタルが着いたウルトラマンゼロが両手を上に向け広げ宇宙を高速で飛行していた。

「久しぶりにテクターギア脱いで体が軽いな……………馴れるまでに時間掛かりそうだ……………手頃な相手はいないものか……………」

自分のウォーミングアップに最適な相手がいないか探していた、惑星を出る前にレオともう一度戦っておけばよかったと考えていると自分の横を通り過ぎる青い飛行物体が現れた。

「ありやまさか……………」

その青い飛行物体を追い掛けていると空中に無数の岩塊が浮かぶ無人の星、惑星アルファに辿り着く。

「待ちやがれ宇宙怪獣ベムラー！」

その青い飛行物体を宇宙怪獣ベムラーだと思い追跡していた、その怪獣を自分のウォーミングアップ相手に考えていた、額の緑のランプ、ビームランプから緑色の細い一筋の光線、エメリウムスラッシュを発射し飛行物体に命中し惑星アルファの大地に墜落し砂煙を上げるとゼロもその大地に降り立つ。

「俺のウォーミングアップ相手になってもらうぜ」

構えると砂煙は収まり、飛行物体が落下した場所から黒い不気味な方に顔が付き鋭い爪を持つ巨体の生物が起き上がる。

「ベムラーじゃねーだと!？」

自分が思っていた怪獣ではない事に驚いていた、その怪獣の名はビースト・ザ・ワン・ベルゼブア。

ゼロが言うベムラーの突然変異種と呼ばれている怪獣である。

「相手にとって不足はねーぜ、ちょっとばかり相手になってもらうぜ!」

ゼロは走りだしザ・ワンに強力なパンチを叩き込むが。

「効いてねーだと!？」

ザ・ワンは何事も無かったかのようにゼロの右腕を掴み無理やりあらぬ方向へ曲げていこうとする。

「グワアアアア……………!」

その激痛に悲痛な声を上げるが「舐めるな!」と声を上げてからザ・ワンの腹部を蹴り飛ばし離れて距離を離す。

「少しはやるじゃねーか」

口ではそうは言うが内心ザ・ワンを舐めてかかっていた、ベムラー

ザ・ワンは大声で鳴き叫ぶと大地に降り光線を吐きながらゼロに接近していく。

「グウウウーツ!?」

腕をクロスして光線を防いでいくがダメージは大きくザ・ワンは接近していく、ゼロの前に立つと腕を振り下ろし打撃を加えていく。

「くっそおおおおおーっ!!!!!!!!!!!!!!」

自棄になりダメージを顧みず立ち上がりザ・ワンの顎に頭突きを食らわせ頭のブーメラン、ゼロスラッガーを抜いて握りザ・ワンに斬撃を食らわしていく。

「デリヤアアアーツ!!!!!!!!!!」

体を斬り付けていき更に回転して足を勢いよく伸ばしザ・ワンにキックを食らわして蹴り飛ばす。

「これで!」

左腕を水平に横に伸ばし右腕を拳にするとその拳は輝く。

「終わりだあああああーっ!!!!!!!!!!!!!!」

そして腕をし字に組んで右腕から白い光線、ワイドゼロショットを発射した。

光線はザ・ワンに命中する、だが耐え切ろうと体で受け止める。

「なっ……これならあ！」

出力を上げて威力を上げていくと同時に光線の光が強くなっていく。

「グウウウウーッ！！！！！！！！」

ザ・ワンは尚も耐え抜こうと踏張るが後退りバランスを崩す。

「消し飛びやがねええええええええええええええええーっ！！！！！」

その叫びと共にザ・ワンは大爆発を起こし組んだ腕を下ろすと胸のクリスタルのカラータイマーは赤、黒と点滅し始める。

「力……使い過ぎたか……」

立っているのもやっとな状態で体がふらついていた、すると背後に気配を感じ振り向くとそこにはフジツボのような物が無数飛び出た怪獣がいた。

「四次元怪獣ブルトン……！」

四次元怪獣ブルトン、空間と時間を自由に操る怪獣である。

フジツボみたいな壺の穴の中からアンテナみたいな物を出し光らせ鈴の音のような音を鳴らせると辺りの空間が歪んできた。

「まさか……」

するとガラスが割れたように背景に穴が空き吸い込まれそうになる。

「う……くそ……うわあああああーっ!!!!!!!!!!」

疲れ切っていたゼロはその穴の中に吸い込まれていくと倒されたが、ワンの肉片も共に吸い込まれていき穴は塞がってしまった。

T o b e C o n t i n e d . . .

STAGE 01【新しい光】（後書き）

因みにザ・ワンは死んでいません、まだ最終形態になっていませんから。

次回から六課が出るかと。

サブタイの話数表記はOVAでのSTAGE で。

中心はとりあえずゼロ、ダイナ、コスモスです。

次回予告

はやて

「怪獣が現れたみたいや!」

スバル

「また……………」

なのは

「その君! 危ないから下がって!」

ゼロ

「人間が空を飛んでる……………!」

局員

「あの巨人も生物も危険だと判断された」

なのは

「それは……間違ってる……！」

次回『STAGE 2【ミッドチルダ】』

STAGE02【ミッドチルダ】（前書き）

言い忘れた事が、前回のザ・ワンがベムラーという設定はハナト・バーニングブレイブさんの設定だと言う事を、大変お騒がせしました。

登場怪獣

古代怪獣ゴメス

地底怪獣マグラー

地底怪獣テレスドン

超古代怪獣ゴルザ

インセクタイプビースト・バグバズン

登場

STAGE 02【ミッドチルダ】

「うおおおおおーっ！！！？」

四次元怪獣ブルトンによって空間の割れ目の中に吸い込まれてしまったゼロはどこか緑が生い茂る森の中に落下しそれに驚いた小鳥や小動物達は走りだし逃げる。

「痛え……………ここは……………」

エネルギーの消耗が激しいと気付いたゼロはその巨体を小さくしていき等身大サイズとなる、すると点滅していたカラータイマーは青く輝き点滅は止まる。

「どこの惑星だここは……………」

空を見上げると青空にも関わらず二つの月が見えていた、聞いていた地球ではない別の惑星と考える、するとまたカラータイマーが点滅する、

この星ではウルトラマン達のエネルギーの太陽光が弱いのだろう、どうするか考えた末、前にウルトラマンメビウスというウルトラマンに会った時に見せてもらった地球のアニメという物に出てきた人間の姿を借りる事にしその姿になる、

青い髪の毛にアホ毛が二本、エメラルドグリーンに輝く瞳の青年に姿を変える、服装は白を基準にしたボロボロの服で腰にガンホルダーが掛かっており中にはウルトラガンXという銀色の銃が刺さっていた。

「これでよし……………」

ゼロは歩く事にした、まずは情報収集だと、どこか人口密集地がないかと探すがまずは森を抜けるのが先決であった、見るからに深い森の中、こんな場所に人がいるわけない、そう思い足を動かしていく。

（ずいぶん深い森だな……………軽く気味が悪いぜ……………）

心中で呟いていると大地が揺れ始めた、何かただならぬ気を感じ耳を澄ました。

揺れは強くなり大地を切り裂いて二体の怪獣が姿を現した、背中に甲羅を持ち頭部に曲がった角に長い牙が左右に生えた二足歩行の古代怪獣ゴメスと、四足歩行で背中にトゲが並んで生えている黒い岩石のような地底怪獣マグラーが出現しゴメスと争い始めた。

「縄張り争いって奴か……………」

ゴメスとマグラーが争うところを満てそう考える、体力も少し回復してきた、元の姿であるウルトラマンの姿に戻ろうと翼が折り畳まれたようなオレンジのレンズが付いたアイテムを出すが。

「ありやなんだよ……………」

ゼロが見たのは空を飛ぶ白い服や黒い服を纏った人間だった、地球

人の写真は見た事ある、その人間達は地球人に似ていた、地球みたいな惑星だと考え始めていた。

「あなたそこで何してるんですか！」

後ろから声を掛けられ振り向くとそこには青いショートヘアの少女とオレンジのツインテールの少女が、両者とも白い服を基準に中に青いショートヘアのは黒いタンクトップっぽい物と短パン、オレンジのツインテールの方は黒いワンピースっぽいのを着ていた。

「何って言われてもな……………」

正直困った、いつの間にかいたかで通じるかどうか、目の前にいる少女二人や空を飛ぶ女性二人はこの星の住人の軍隊みたいなものだろうと考えたがこんな星、宇宙警備隊の記録にも存在しない、まだ宇宙警備隊が把握していない星があったのかと考えていたが。

「とりあえずここは危険ですから森の外へ避難してください、後で立ち入り禁止区域にいた事を聞きますから」

立ち入り禁止区域に入っていたのかと思ひ現状が分からない今、従うしかないと考え「わかった」と返すと少女二人は森の外まで連れていくと案内され二人の後を着いていく。

ゴメスとマグラーは争っていた、どっちがこの区域を支配する主に相応しいか、だがその争いに割って入る者達が現れた。

「デイベイン……バスタアアアーツ!!!!」

白い服の女性は赤い宝石が付きそれを纏うような感じで金色の装飾が付いた杖をゴメスに向け桃色に輝く砲撃を放った。

砲撃はゴメスに直撃し大きく吹き飛ばされマグラーは横を向いて彼女達を直視する。

「非殺傷設定解除してるなのは隊長？」

「もちろん、フェイト隊長」

黒く露出が高い服を纏い黒い斧のような杖を持ち金髪の長いツインテールのフェイト隊長と呼ばれた女性は白い学生服にも見える服を着て長いスカートを履き茶髪のツインテールのなのは隊長と呼ばれた女性は言葉を返した。

「この区域の近くには市街地がある、出したらダメだ」

「了解！」

なのははもう一度桃色の砲撃を放ちマグラーに直撃させダメージを与えていく。

「グウウウ！」

二体には飛ぶ相手に通じるような有効な手段はなくてただ空を見ているしかなかった。

「私が………！」

斧の形が変形し弾丸みたいな物がリロードされていき先端から金色

「スマツシヤアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

さつきより強力な桃色の砲撃とフェイトからは三つの金色の砲撃が放たれゴメスに直撃した、浴びせ続けていると砲撃は止まりゴメスの眼から輝きは失い倒れ込み絶命した。

「あまりいい気分じゃないよね……………」

「うん……………アツチじゃSRCが怪獣保護してるけどこっちじゃ危険生物と判断されて保護もできない……………」

何やら怪獣を倒すのに抵抗感があり自分達が所属している組織の決定にあまり納得しているようには見えなかった。

（なのは隊長、フェイト隊長）

すると戦闘が終わったのを見計らったのか二人の頭の中に先ほどのオレンジの髪の毛の少女の声が響く。

（どうかしたのティアナ？）

テレパシーみたいなもので会話しているようでオレンジの髪の毛の少女はゼロの事を報告した。

（わかった、じゃあ後の事は地元の局員に任せるからそっちに行くね）

そう返事を返すとティアナと呼ばれた少女は「了解」と返事をしそれ以降は声は響かなかった。

「立ち入り禁止区域に人なんて……………」

「立て続けに現れる怪獣と何か関係あるのかな……………」

二人は喋りながらその場を後にするが何者かが見ていたのを誰も知る由は無かった……………」

戦闘区域から離れた場所に大型のヘリコプターが着陸していた、その側で立ち入り禁止区域に入っていた為ゼロはティアナと呼ばれた少女と青い髪の少女の事情聴取を受けていた。

「まずは名前から……………」

また困る事態が起きた、このままウルトラマンゼロなんて答えるわけにはいかない、この姿での名前を考えなければ、何がいいか考えるが時間は待ってくれない、そしてすぐに思い付いた。

「カザモリ……………ノゾム」

カザモリ・ノゾムと名乗った、内心今の自分の姿のモデルにした刹那・F・セイイとか名乗れば良かったと思っていた。

「カザモリ・ノゾム……………地球の人の名前みたい」

青い髪の少女は答えた、別の惑星かと勘違いしていたのをすぐに気付かされた。

「どこの世界出身？」

「世界？」と疑問風に問うと「次元放流者」と知らない言葉を出され困惑する。

ティアナは簡単に教えた、ここはミッドチルダと呼ばれる魔法と科学が発達した世界で様々な世界を管理する組織の時空管理局の一部隊、機動六課の局員だと。

（マルチバースか……………）

宇宙は一つだけではない、いくつもの宇宙が並行し無数に存在している、それを多宇宙〓マルチバース理論である。

一つの宇宙は泡のような形状でその壁を抜けると無数の宇宙の泡が浮かぶ超空間をマルチバースと呼ばれているのだ。

ゼロ……………カザモリ・ノゾムは四次元怪獣ブルトンにより自分の宇宙の泡の壁を抜けさせられこの世界に迷い込んだと納得していた。

「もう一度聞きますが……………どこの世界出身ですか？」

地球と言えば早い何か聞かれてボロが出たら不味いと思い地球の世界にある宇宙出身と答えた。

「地球人は宇宙に出て新天地を求めてるんだ、俺はその船で産まれたんだ」

聞いていた地球の情報を上手く使い二人に話す。

「という事はスペースジェネレーションだね」

そこになのはとフェイトが降りてきた。

「あ、ああ」

聞き慣れない言葉だが宇宙出身の人間の意味だと言葉だけで理解し領いた。

「私もその世界出身だからわかるよ」

助け船が出たと思い喜んだ、同じ世界の人間が居た事に、これなら上手く話を合わせられると。

「私は管理局機動六課に今は所属してる航空戦技教導官で今はスターズ分隊長の高町なのは、階級は一等空尉」

「私は同じく今は機動六課に所属、ライトニング分隊長の隊長、フェイト・T・ハラウン、執務官だ」

二人が名前や階級、所属を教えるとその部下である二人も。

「あたしはスターズ分隊長の隊員のスバル・ナカジマです、階級は二等陸士」

青いショートヘアーの少女、スバル・ナカジマが自己紹介をすると。

「私は同じくスターズ分隊長のティアナ・ランスター、階級も同じく二等陸士です」

今いるメンバーの自己紹介が一通り済みまたノゾムは自分の名を名乗る。

「取り敢えず知らないからとはいえ立ち入り禁止区域に入っていたからそれなりの対応は取らせてもらっよ」

あまり納得していなかったが仕方ない為、後今自分が置かれている状況を考えれば彼女達の指示に従った方が身の為だと一番理解している為その指示を受けた。

（これじゃ執行猶予の意味ねーな、まあ異世界だからノーカウントか）

また罪犯したなと思い地元の局員に身柄を渡されなのは達はヘリコプターに搭乗しその場から去っていった。

（まったく……ついてないぜ……アッチじゃスゲー強い怪獣と戦ってボロボロにされたと思ったらブルトンにこの世界に飛ばされて……）

「はぁ………」とため息を吐くしかなかったのだった。

「報告書、確かに受け取ったよ」

機動六課のオフィス……オフィスと言ってもテントだった、三ヶ月

前にある一味から襲撃を受け建物は崩壊しそのオフィスがあった土地に借りでテントを建てている状態だった、

建物の方は建て直されている途中で骨組みはできていた。

そこでは茶色を基準にした制服を着たスバルとティアナが作成した報告書を白と青を基準にした制服を着たなのはが受け取っていた。

「いつもの怪獣事件より多めになっちゃいましたけど」

恐らくノゾムが居たからだろう、更に立ち入り禁止区域、その場に居た理由等々も書いていたのだろう。

「まあね……怪獣事件が増えたと思ったら今度は次元放流者、どうなってるんだろう」

怪獣は昔から居たのではなくつい最近になって現れたのだ、その為に対応が完全抹殺だがそのような事をできる魔導師は限られているのだ。

「最近次元震も多発していますしね」

次元震とは、世界全体を揺るがす大規模な地震でありその拍子に管理局が管理していない管理外世界から人間が流れ着いたりする為次元放流者となる。

「それにまた……消えたみたいですよ」

「またなの？」

「今度は西部の市街地が次元震に巻き込まれてまるごと」

ミッドチルダでは最近次元震が多発しておりそれが影響し街がまるごと一個どこかの世界に転移してしまう事件が起きていたのだ、そ

の転移した街はどこに行ったかは誰も判らず捜査中。

「まさかここ（中央）も巻き込まれたりは……………」

六課のオフィスは中央区画の湾岸地区にある為、東部西部南部の区域が同じように消えている事態に。

「わからないけど……………注意はしておいた方がいいね」

この話はここで終わらせよう、そう考えた矢先だった、突然警報が鳴り響いた、警報の原因はまた怪獣が現れたらしい、しかも昼間の場所に。

「また怪獣……………！」

「二人共、準備が終わったらすぐにヘリポートね！」

「はい！」と返しスバルとティアナはその場から去りなのはも準備を始めた。

「なんだ？」

地元の局員の施設で一日寝泊まりして次の日に地球がある宇宙に送られる予定だったがそれでも警報が鳴り響き騒ぎに気付く。

「お、いいとこにいた！」

ノゾムは近くを慌ただしく走る局員に話し掛け騒ぎの原因を聞いてみる。

「怪獣だよ怪獣！　しかも人を食う！　今までこんな事なかったのにな………君もここにいたら危険だ」

立ち入り禁止区域を監視する為にこの隊舎は森の近くにある、怪獣はまっすぐ市街地へ向かっている為隊舎もその進行方向の上でありこのままでは踏み潰される可能性がある。

「すまねえ………アンタ名前は？」

「俺？　サンジヨウ！」

サンジヨウ局員はノゾムを連れて隊舎から出ようとする。

「こっちだ！」

外へ出ると森とは逆方向の方を向き。

「そっちに行けば避難区域がある、そこに行ってくれ！」

サンジヨウは一般局員の武装の魔導師の杖を持ち飛び立つ。

「すまねえな………サンジヨウさん」

ノゾムは回り道をし森を目指した。

その上を六課のヘリが通り過ぎ中から魔導師、バリアジャケット姿のなのはとフェイトが魔導師の杖であるデバイスを持ち飛び立つ。

「ライトニング分隊は市街地で避難誘導、スターズ分隊は戦闘区域

で地元の局員と共に怪獣を攻撃」

なのはがスターズ分隊のスバルとティアナ、フェイトが担当するライトニング分隊のスバル達より年下の赤毛の少年エリオ・モンディアルとピンクの髪の毛の少女キャロ・ル・ルシエに指示を出しながら怪獣が肉眼で確認できる位置へ。

「アレが人間を食べちゃった……………」

暗くて黒く見えるが体は白くカブトムシの幼虫に似た体格に足と手が付き尻尾の先端にも頭があり背中に羽根が付いたインセクトタイプビースト・バグバズンだった。
局員達は魔法砲撃を放ち総攻撃しているが進行が止まる気配はなかった。

「私達も！」

「うん！」

なのはとフェイトも砲撃を開始、二人の攻撃は威力が高くバグバズンは後退る。

「このまま攻撃を維持し続けてください！」

フェイトは全体に聞こえるように指示をする声を上げる、局員達はそれに同意し砲撃を続ける。

「やるじゃねーか」

ノゾムは森の中に入っており戦闘を見守っていた。

「俺が出なくてもいいか」

バグバズンは弱っている、全力じゃない敵を相手にしても疲れるだけ、そう考え見守る事にした。

次第にバグバズンは痙攣し始め横にゆっくり倒れ青白い光を全身から発し粒子状に四散し絶命した。

「案外呆気なかった……………」

スペースビーストと呼ばれる怪獣の種類の中で能力が空を飛ぶ程度しかなく大型ビーストの中でも弱い部類に入りバズー力級の砲撃を一発食らえば倒れる怪獣なのだ。

「だけど人を食べる……………なんて恐ろしい奴なんだ」

「JS事件終わってから三ヶ月、何か起きそうだね……………いや、もう起きているね」

JS事件とは、大規模テロが首都のクラナガンで起こりその主導者、ジェイル・スカリエッティの名前の頭文字のスペルを取り名付けられた、その時活躍したのは機動六課であった。

「気に入らねーな」

ノゾムはバグバズンが倒されたのだがこの雰囲気は気に召していなかった、なのは達時空管理局ではない、この一帯だ、まだ何かあると感じていた。

そしてノゾムの感じていた気に入らない……………嫌な予感的中してしまった。

昼間のようにまたもや大地が揺れて亀裂が入り地割れが起こり地底から巨大な生物が二体も現れた。

一体は筋肉が目立ち頭部に硬い甲羅のような物に包まれた超古代怪獣ゴルザともう一体は茶色い体で頭が大きく暗やみでも見通せる光る目を持った地底怪獣テレスドンが現れた。

「また怪獣！」

どうやらゴメスとマグラーが居なくなつたのを察しここを自分の縄張りにしようと出てきたらしいが同時に現れやはりどちらがこの場所の主になるのが相応しいか戦い始めた。

「デイベイン……………！」

デイベインバスターを放とうとデバイス、レイジングハート・エクセリオンの先に魔力を集結し魔力スフィアを形成していくが。

「グゴオオオオオ……………！！！！！！！！！！！」

ゴルザは額から紫に輝く超音波光線を放つと取っ組み合っていたテレスドンを吹き飛ばすと首を動かして光線は地面に直撃し爆発し爆風で局員が吹き飛ばされてしまう。

「光線……………！！バスタアアアアア……………！！！！！！！！！！！」

まさか光線を放つとは思わず動揺したがゴルザに砲撃を放ったが。

「グゴオオオ……………」

「効いてない……………！！！」

ゴルザの硬い筋肉と皮膚にはデイベインバスターは蚊に刺された程度にしか感じていないみたいで額に光が集まり超音波光線がなのはに

向けて放たれた。

「なのは！」

【S o n i c M o v e】

フェイトの杖バルディッシュ・アサルトのコアが輝くとフェイトは一瞬にして移動、なのはの元に行き抱えてまた一瞬にし移動し超音波光線を避ける。

「助かった……………ありがとうフェイトちゃん」

「礼には及ばないよ……………けど……………」

テレスドンは起き上がり口から火炎放射を吐きながらゴルザに接近しまた激突する。

地元の局員達は爆風により傷を負い退避していた。

（なのは隊長！）

ティアナがなのはに魔導師の間で行われる通信方法、念話で会話し指示を求める。

（ティアナとスバルは負傷した局員達を退避させるの手伝って、怪獣達は私達が何とか食い止めるから）

「了解！」とスバルの声も響くと念話は切られなのはとフェイトは倒さないで今は食い止める、そう考え局員達がいる方向とは逆の方向に回りゴルザとテレスドンを攻撃する、思惑通り注意は二人の方に向けられた。

「これで！ アクセルシューター！ シュート！」

「プラズマランサー！ ファイヤ！」

無数の魔力スフィアが形成されゴルザとテレスドンに向けられ放たれる、攻撃ではなく牽制として、局員達が退避する時間を稼ぐ為に。

「こっちだよ！」

砲撃を足下に撃つたり振り向こうとすると魔力スフィアを操り回り込ませ背中を攻撃し注意を前、なのはとフェイトの二人だけに向かせる。

少しずつ後ろへ下がりが森のもっと深くに誘導していく。

だが誘導するだけでは怪獣は倒せない、二人は思った、こういう時に自分達の宇宙に存在する英雄が来てくれればと、二人は願うしかなかった、来るかも分からない英雄が来てくれる事を……………

「さてと、そろそろ始めるか、アイツら強そうだし」

ノゾムはゴルザとテレスドンを見て呟くと懷から昼間に出したアイテムを出し羽根のように広がりメガネみたいになる。

「デュワッ！」

そのアイテム、ウルトラゼロアイを目に着眼するとスパークし赤と青の細い光が回りを舞うとゼロスラッガーが乱舞する。

頭から元の姿であるウルトラマンゼロの姿に戻っていくと頭部にゼロスラッガーが装着され両手を横に広げ拳が上を向くように曲げ巨

大化していく。

回りからは光の柱が立ったように見えていた、その光が消えると、森の外からは背中が見え、森の中側からは前が見え二つの眼と額に輝くランプと胸に輝くクリスタルが見えていた。

なのはとフェイトはその姿を見て自分達の宇宙の英雄と酷似しているのに気付いた。

「まさか……………！」

「光の……………巨人……………！」

フェイト、なのはの順に喋っていく。

「なによあの巨人……………」

「すごい……………」

ティアナ、スバルも思った事を口に出す。

「デエアッ！」

その巨人は声を上げるとなのはとフェイトの二人は嬉しそうに声を上げた。

『ウルトラマンー！』

ゴルザとテレスドンはゼロに気付き振り向くとゼロは挑発するように人差し指と親指を伸ばし二体に向け。

「へっ…………俺が相手になってやるぜ！　ゼアアッ！」

大きくジャンプし二体の近くにもつと接近すると先にテレスドンが手を出してきたがそのテレスドンの顎を蹴り上げてからその腹部にキックをし蹴り飛ばす。

「ギシヤアアアアーツ！！！！！！！！？」

「グゴオオオオオツ！！！！！！！！！！！」

背後から超音波光線が放たれるがゼロは空を飛んで避けてから高い所から落下し急降下キックをゴルザの頭部に叩き込む。

「へ、思ったより弱えな！　オラアッ！」

立ち上がったゴルザに強烈なアッパーを食らわす、テレスドンも立ち上がり火炎を放つがゼロはすぐに移動し火炎はゴルザに命中しダメージを与えられていたと思っていたが誰も気付いていない、ゴルザも演技していたからだ。

「仲間撃つなんてご苦労さん！」

仲間ではないがゼロから見たら仲間である、このままテレスドンに攻撃しようと飛び跳ねてウルトラゼロキックを放とうとしたが背中に火花が散り地上に落下してしまった。

「何!？」

なのは達は動揺していた、いきなりの事だったからだ、新手かと思
いゼロの背後を向くとそこには局員達がデバイスを向け魔力スフイ
アを形成し砲撃を放った後だった。

(ティアナ! どうなってるの!?)

(中央の本部から増援部隊が出てきたのですが……………)

ティアナ……………いや、この地元の局員達も同じだった、あの巨人は
怪獣と戦ってくれている、まだ分からないが害があるようには見え
なかった、あの暖かい光を浴びたからだ。

(ティアナ、スバル、できればいいから本局の人達の説得をお願い
! 私達もそっちに行くから!)

フェイトが指示すると二人は返事を返し行動に移る。

「なんであの巨人を攻撃するんですか？」

増援部隊の隊長に問うティアナ、こういう言葉にする事はスバルよ
りティアナの方が適切である為だ。

「本部はあの巨人も怪獣と同様危険性があるものと判断しての行動
だ」

部隊長が答えた、本部の指示は絶対、だから攻撃を加えると。

「ですけど! あの巨人は怪獣達と戦ってくれています!」

「あの怪獣達を倒したら次は我々を襲ってくるかもしれない、そう容易く信用できるものじゃない」

増援部隊の砲撃は止まず二体の怪獣とゼロはその攻撃を浴び動けな
いでいた。

（くっそ……………人間ってこんなにも野蛮なのかよ！）

レオから大体の事は聞いていたがここまで酷いとは思っていなかった。

増援部隊の行動に対し地元局員やスバルとティアナ達は納得の意を
見せていなかった。

「くそ！ 邪魔だあああつ！」

腕をL字に組んでワイドゼロショットを増援部隊に放とうとしたの
だがその局員の一人一人がK76星にいたピグモンと重なり放てな
かった。

打開策もなくこのまま怪獣共々御陀仏かと思つてると金色の光の壁
が広がりその光は辺りを照らし増援部隊の砲撃を防ぐ。

（いいチャンスだ……………今のうちにあの人間共びびらせてやる！）

ゼロはいい加減キレていた為立ち上がると局員達がいる方に向かっ
て走りだそうとしたが止まった、目の前に自分よりもっと小さい者
が両手を広げ制止した。

それはなのはだった、金色の壁はフェイトが張った物で砲撃を防い
でいた。

「あなたを撃った事はごめんなさい！ だけどこの人達はあなた

の事を知らないのよ！ だから攻撃しちゃって……………」

なのは申し訳なさそうにゼロに話し掛け謝罪の言葉を述べていく。ゼロもなのはの叫びに耳を向けていた、彼女の言葉に秘められた力強さに心が響き。

「身勝手なお願いかもしれない……………ただど！ あの怪獣達を倒して！ 私達の力じゃどうする事もできないから……………！ お願いします！」

頭を深々と下げて頼み込む、身勝手かもしれない、だが彼に縋るしかなかった、怪獣を倒す為に。

「……………」

ゼロは振り向き縄張り争いを再開するゴルザとテレスドンの方に向き直す。

「ありがとう……………あなたが戦う間、私達を守るから！」

首だけ動かし振り向くとそこには自分を守る地元の局員達、サンジヨウもいた、光の道を作りその上に立ち青とオレンジの光の壁を形成するスバルとティアナが、それになのはも加わり桃色に光る壁が形成され増援部隊の砲撃を防ぐ。

「貴様ら！ 自分達は何をしているか分かっているのか！？」

部隊長は声を荒ら上げ怒号を飛ばすがなのは達は怯まなかった。

「分かっていますよそりゃ！」

サンジョウが答えた、今の自分達は正しい事をしている、上の命令で恩人を見殺しにする事はできなかった。

「彼は私達の味方です、根拠はありません、だけど私達の代わりに怪獣と戦ってくれています！」

スバルが力強く叫ぶ、だが増援部隊は砲撃を止めなかった。

「暖けーな……背中が」

初めてだった、誰かと共に戦う事がほとんどなかったゼロにとっては、仲間なんて必要ない、一人で戦える、そう思っていた時期があった、だがその考えが馬鹿らしく思えてきた、自分の後ろを守ってくれる自分より小さき者達が大きく見えていた。

「いっちょやるか！」

手の平を拳で叩き気合いを入れ直すと構えを取り走りだしゴルザに強烈なパンチを後頭部に食らわせる。

「オラアッ！」

次にテレスドンにキックと二大怪獣に猛攻を食らわしていく。

「ジュワッ！」

向かってくるゴルザに腹部にパンチを叩き込み後退させ更に上段回し蹴りを頭部に連続で打ち込んでいき最後に回転し思い切り足を伸ばし蹴り飛ばす。

「へっ……………ちよろいな」

ゴルザは逃走を測ろうと地面を掘り出すが逃がさない為ワイドゼロショットを放とうと腕を構えるがテレスドンの火炎攻撃を受け前のめりに倒れてしまいゴルザは地底に逃走してしまった。

「逃げられたか……………」

「ギシヤアアアーツ！！！！」

テレスドンは吠えながら突進してくるがその勢いを利用し背負い投げをし地面に叩き込むとテレスドンは全身を痙攣させると両手を下げ目から輝きが失い息絶えた。

「勝った！」

なのは達は喜んだが増援部隊は攻撃してくるかと思いい砲撃を止めなかったが魔力が尽きてきて砲撃は止まった、なのはら六課と地元局員の粘りの勝利だった。

ゼロはなのは達の顔を見てしっかりと覚える、カラータイマーが点滅し活動限界時間ギリギリまで、ゼロは名残惜しく両手を上げ広げると夜空へ飛び立った。

「ありがとう……………ウルトラマン」

局員達は地上に降りると部隊長がなのはに。

「本部の決定を無視した行為、上に報告しておくから覚悟しておくんだな」

部隊長はそう言い残し増援部隊を引き連れ帰還した、なのはとフェイトはやっちゃったなと考えていた、自分達の部隊は友が実験という形で設立した部隊で問題を起こせばトカゲの尻尾のように切り落とされかねない為今回の解散と言い渡されそうと。

「まあ何か言われたら言われたらで諦めよ？」

フェイトにそう言われ今の事だけを考える事に、すると森の中に人影が一瞬見えた。

「何かな？」

なのはは気になり森の中に再び入り歩いているとそこで目にしたのは……

「ノゾムくん！」

それは傷だらけで倒れているノゾムだった、なのはは急いでノゾムの元に駆け寄るのだった。

T o b e C o n t i n e d . . .

STAGE02【ミッドチルダ】（後書き）

次回『STAGE03【機動六課】』

STAGE 03【機動六課】（前書き）

一万字越えた……………書いてる時はずっとDream Fight
er聴いてました（笑）

ゼロのファーストステージはここまです。

登場怪獣

古代怪獣ツインテール

地底怪獣グドン

登場

STAGE 03【機動六課】

ここは三ヶ月前に起きたJS事件の被害に遭い工事が行われている現場、朝日が昇り辺りを照らすこの場の地底に眠る巨大な卵があるのに誰も気付かなかった、いや、気付くわけがなかった………これはこの場に最初からあったものではなかったのだから………

*

機動六課のオフィス跡地、そこに何個も建てられた本部代わりのテナントの内の一つ、医務室として使っているテナントの中のベッドの上、そこに横になり熟睡しているのは惑星アルファでのザ・ワンの戦闘に続いて別宇宙であるミッドチルダに迷い込む、その日にゴルザとテレスドンとも戦ったウルトラマンゼロ、カザモリ・ノゾム。ノゾムは眠りから目覚めようとしていた、産声のようなものを上げ

て目蓋をギュツと一回閉じてから開き起き上がると両手を挙げて大きな欠伸をする。

「ふわあ〜……………ここどこだ〜」

回りを見るとそこは昨夜までいた管理局の一部隊の隊舎ではないのが分かった、そこはテントではないからだ。

「確か……………あの後……………」

テレスドンを倒した後の事を思い出そうと腕を組んで考え込んでいると中に光が射し込むと同時に金髪で白衣を着た先生と呼ばびたくなるような女性が入ってきた。

「気が付いた？」

優しく話し掛けてきた、少し照れつつ頷くと。

「私は機動六課の医務担当のシャルよ、カザモリ・ノゾムくんよね？」

問われてもう一度頷いた、本名は違うがこの姿ではその名前のため。「ここは？」、ノゾムはまだここがどこか分かっていないため聞き、そしてシャルはここは機動六課の本部と答えた。

「まあ三ヶ月前の事件で襲撃受けてオフィスと隊舎は崩れて今は工事中でね、前は戦艦使ってたけど年代物で……………だからここに戻ってテントを張って活動を続けてるの」

現在の機動六課の現状を話すがこれを説明しにここに来たのではない

かった。

「あなたが倒れたのをなのはさんが見付けてすぐにここに運んできて手当てしたり検査したのよ」

「け、検査!？」

思わず声を上げてしまった、どんなに人間の姿をしていても中身はそのまま、それを意味するのは……

「あなた……人間じゃないわよね？」

やっぱりと思った、科学が発達しているこの宇宙の星ならすぐに解るはずである。

「その事で六課の部隊長が用があると……」

要はその部隊長に会ってどういう意味か説明しろという意味、白を切る事は確実に不可能である、ノゾムはその部隊長に会う事を決め医務室代わりのテントから出てシャルムの案内で部隊長室代わりのテントに行く。

「ここよ」

シャルムが扉を開けようとしたがノゾムはズガスガと入っていく。

「よー来たや〜」

中には昨日会ったのはとフェイト以外に濃いピンクの髪の毛のポニーテールのフェイト以上かもしれないスタイルが良い女性とそれに対して赤毛の三つ編みの目が吊り上がっている幼女に青い狼に手

の平サイズの白っぽい髪の毛の少女に茶髪のショートヘアーのなのはやフェイトに比べると落ち着いたスタイルの女性がいた。

「わたしがこの機動六課の部隊長の八神はやて、階級は一等空尉や」
茶髪のショートヘアーの女性が八神はやて。

「わたしはリインフォース・ツヴァイです、階級は空曹長です」
手の平サイズというよりは妖精サイズの少女はリインフォース・ツヴァイ、以後リイン。

「アタシはスターズ分隊の副隊長のヴィータだ、階級は二等空尉」
赤毛の幼女はヴィータ。

「私はライトニング分隊の副隊長のシグナムだ、階級は二等空尉だ」
ピンクのポニーテールの女性はシグナム。

「ザフィーラだ」
「犬が喋った!？」
「狼だ」

青い狼はザフィーラ。

「改めて紹介するね、私は高町なのは」
「私はフェイト・T・ハラオウン」

なのはとフェイトが名前を紹介するとノゾムも改めて名前を言いこ

ここで自己紹介タイムは終わり。

「本題や、昨夜ここに運ばれてきての手当てした後の検査の結果の事なんやけど」

手元の書類の検査結果を見ながら話すはやて。

「検査結果は突っ込み所満載で、人間の体ではないって事がわかったんや」

関西人だからか、突っ込みとかそういう言葉を使う、知っていたのははやてとシャルマルだけらしく他の隊長や副隊長達は動揺を隠し切れておらずヴィータからは吊り上がっている目を更に吊り上げらせて睨んでくる。

「これについて説明してもらえへんか？」

説明を求められたがノゾムも負けじと普通の時よりも目を吊り上げ「条件がある」と、ヴィータは態度が気に入らないか掴み掛かりそうになったがシグナムに止められノゾムの条件を聞く事に。

「今から話す事は今ここにいる面子以外には他言無用にする事、それができないなら何も話さないで地球がある宇宙に帰してもらおう」

簡単に深い条件だった、これなら受け入れてもいいとはやて達は念話で話して条件を呑む。

「ならいい」

ヴィータはそんなノゾムの態度を気に入らないらしく常時睨んでき

ていたがそんな事お構いなしに話し始めた、自分はM78星雲のウルトラマンゼロで地球に向かう途中惑星アルファでザ・ワンと戦い勝利したがブルトンによってこの宇宙に転移させられたと。

「あのウルトラマンが……君、だったの？」

ノゾムは素っ気なく「ああ」と返す、根に持っているようだ、攻撃された事に、もしそれが他のウルトラ戦士ならこの宇宙では我々の事は知られていないから仕方ないと済ますがノゾム「ゼロはまだ若い戦士で荒々しい性格のため他のウルトラ戦士のように仕方ないと済ませるには納得がいかないようだった。」

「その事についてはわたしが時空管理局を代表して謝罪させてもらいます」

はやてが頭を下げる他にも続いて頭を下げ謝罪の意を見せる。

「謝ってくれるなら別に構わないさ……………それに……………」

なのはを見て。

「もう謝ってもらったし……………それに俺は……………」

攻撃された事に腹を立ててましてや光線まで撃つてしまおうとしなのは謝罪がなければ局員達を傷付け命を奪っていたかもしれないと思っていたのだ。

ピグモンを助けたのが影響しているようだった。

（もし……………彼女に止めてもらえなかったら俺はあのまま……………）

自分がしようとしていた事に次第に責任感を持ち始め吊り上がっていた目はたらんと下がり申し訳ない表情となる。

「そうだ、お近付きの印に握手、しない？」

「それいいねなのは」

なのはがそう言いだすと騒つき始めてそのアイデアを実行しようとする。まず最初に言いだしたなのはが求めるのだが。

「……………できない……………」

その一言が小さくテントの中に響いた。

「見ただろ？ 俺が局員達に光線放とうとしたり走って襲い掛かるうとしたところを」

「そうだけど……………」

フェイトが声を掛けるがノゾムは淋しそうに微笑み。

「だから……………余り関わらないでくれよ……………」

その責任感により六課のメンバーとの間に壁を作ってしまったのだ。元の姿の自分より小さき者達が自分のような巨人の前に一人で立ち制止した事により局員達に怒って襲おうとしていた自分が恥ずかしくなってきたのだ、

それもあり分厚い壁を作りなのは達とは関わらないようにしようと思っただ、守るという事を少しだけ理解した彼は。

「もういいだろ？」、ノゾムはそう言い残しテントから出ていった、シヤマルと一緒に着いていく事にし追い掛けていった。

「壁……作ってしまったな」

シグナムの言葉に全員頷くとこのメンバーで会話を始めた。

「まるで昔の私みたい」

フェイトはかつて、愛する母親のために罪を犯し、自分に心からぶつかってきたのはと関わらないように壁を作ってしまった時があった、それに似ているという。

「何とかアイツの心の壁、取り払えねーかな」

「さっきまで敵意剥き出しだったお前からそんな言葉が出るとはな」

「うるせー！」とヴィータはザフィーラに返し話を続ける。

「最初は生け簀かねーと思った、けどただ素直になれないだけかなって思ってたさ」

「それは自分の事ではないのか？」

次にシグナムに言われザフィーラと同じように言葉を返した。

「後……身勝手なのは分かる、けど彼がこのミッドにいれば大きなプラスになると思うで」

はやてがそう発言すると。

「そうだけど、それは彼を怪獣と戦わせるための道具として居させるという事にも……」

怪獣を倒せる力を魔導師は持っている、だが昨夜のゴルザのように

砲撃がなかなか効かない怪獣もいる、そう思うとミッドチルダに滞在させたい、その考えはわからなくもないがそれは同時にフェイトの言うようにノゾム「ゼロを兵器という形で置く事と同じような意味になってしまう。」

「そうなんやけど……」

「ここはノゾムくんの意思を尊重した方がいいと思う、だからここにいる間は自由にさせるといふのは？ 変な監視とか付けないで」

なのはのその考えに全員納得し誰かがそれを医務室にいるはずのノゾムに伝えに行く事となった。

「てなわけ、オメーのここの敷地内では自由ってことだ」

先ほどの六課の隊長陣で話し合った事をヴィータがノゾムに伝えに来ていた。

「外に出るとIDとかやら色々めんどくせーから出るなよ？ わかったか？」

「へーい」と返事を返されるが少し不安になっていた。

「わかってるのかよ本当に……」

去ろうとしたらノゾムは呼び止めた、気になっていた事があるからだ、自分を助けた事で上層部から何か言われていないとかサンジヨウら局員達はどうなったかとかが。

「それなら心配すんな、六課は三ヶ月前のテロ事件で実績上げたからお咎めはないかもしれねー、

あっちの局員達の方はうちらが無理やり援護させた事にしとくようにつてなのはとフェイトが言ってたし」

少しは安心できるようで目を瞑り胸を撫で下ろすと。

「ついでだから演習場連れて行ってみたら？」

「そりゃいいな、まだ建て直してる最中だから他に見るもんねーかな」

話は勝手に進んでいきノゾムは流れに身を任せて六課の魔導師が訓練している演習場へ。

「アイツらが六課のフォワード陣」

演習場にはスバルとティアナ、直接はまだ会ってないエリオ、階級は三等陸士、同じ階級のキャラも居りなのはとフェイトの下、訓練を行っていた。

「アタシもあっち行かなきゃなんねーから適当に見てな」

そしてヴィータも演習場に入っていた。

「スゲー訓練」

その訓練は激しく厳しいものでまだ十代の少女達が耐えられるものか
と思いつながら見ていた。

その訓練を見ているとレオと修行していた頃を思い出してくる。
K76星で修行していた時のことを……………自分はよくあの厳しい
修行を耐えてきた、よく心が折れずに続けてこられた、それは負ける
事が一番嫌いだから、もっと強くなりたい、負けん気が強かった
からだ、だが彼女達はどのようなのだろうか、傍から見ればものすごい
厳しい訓練、レオと同じぐらいかもしれない、なのになぜ彼女達は
耐えているんだと思い始めてきた。

（アイツら……………なんであんな厳しい訓練続けていられるんだ……
……………）

じつと見つめ修行時代、レオと話していたことを思い出していた。

テクターギアを装着していた頃。

「ゼロ、もしこの修行を終え警備隊に戻ればお前も我々のように他の
仲間のウルトラ戦士達と組んで戦う時もある」

その時は唐突だった、なぜレオはその話をしてきたか理解できず。

「ブルッ！」と現在、ノゾムの体は震え何かを抱き締めるように両肩を手で掴んだ。

「避けるなあ！」

「うわあああああつ！！！！！！！！」

そして次、やはりK76星での修行時代、レオに逆らわなくなってきたゼロ（テクターギア装着）は特訓に励んでいた、何でも師匠であるセブンにもやられた特訓だとか。

ゼロは走る、後ろから迫る戦車怪獣恐竜戦車の戦車に乗り爆走するレオから。

何でも横に避けてはいけなく避けたら必殺技のレオキックを食らう事になるらしく。

「絶対横に避けるな！」

「うわあああああつ！！！！！！！！」

掛け声というより悲鳴に近い叫びを上げながら全力で走っていた。

「俺だってこの特訓やるかどうか迷ったのだからそれに答えるよ！」

この特訓には自分もトラウマがあるらしくレオの声も少し高かった。

「うわっ!？」

岩に躓いて転び振り向くともう戦車は迫っており。

「ギヤアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その戦車に踏み潰され乗り物恐怖症に一時期なつた事がありこの言葉を覚えた、「道に歩く時には車に気を付けること」と。

「……………」

現在、ノゾムは無言だった、自分はこんな恐ろしい修行をしていたのかと思いだしまるで寒い地域にいるかのように震え、口をパクパクと開いたり閉じたりとしていると。

「何しているのだ？ 気持ち悪いぞカザモリ」

後ろからシグナムに声を掛けられて我に戻るが声は震えていた。

「そ、そうですね、すみませんでした」

「なぜ敬語……………まあいい」

シグナムが来たのは訓練に参加するのではなくたまたま近くを通りかかるうとしたらノゾムが見えたからである。

「どうかしたか？」

思った事を率直に聞いてみた、なぜ彼女達はあんな厳しい訓練を続けていられるんだと。

「そうだな…………それは人それぞれだからな……………共通しているのはそれぞれ夢があるからだな」

「夢？」、疑問符で返しシグナムは話を続けた。

「そして誰かを守りたい、もっと強くなりたい、だからあの訓練を受けているんだ」

誰かを守りたいから強くなりたいなんて昔の自分ならくだらないと言いつけていただろう、昨夜の戦いでその意味は多少理解できるようになっていた。

自分なんかより立派な意味があるじゃねーかと思い再び恥ずかしい気持ちに。

「お前は何のために強くなりたいと思っていたんだ？」

「……………負けたくねーから、他人に頼らないで誰にも負けないようにって思っていたけどアイツら見てるとなんか恥ずかしくなってきたぜ……………」

「そうか」とふと笑いながらシグナムは返す。

「ホントは地球に行こうとしたけどさ、任務とかじゃなくて進められたからなんだよ……………」

次はノゾムが口を開きシグナムが聞く側に。

「だからさ、地球に行かなくてもいいんだよ」

何を言うか分かっていたが何も言わずに頷くだけだった。

「だからさ……そのな……ここにいて……」

「いいかな」、それを言いたいのだがまだ壁があるため言い出せないでいた。

「いいのではないか？ 行っても行かなくてもいいなら寄り道しても、それにお前と我々の間にある壁、どうにかならないか？ お前が局員達に手を加えようとした事なんて我々以外しか気付いてはいない、それに気にしてはいないさ」

そう言われると吊り上がっている目は糸が切れたように下がり疑問と不安が入り交じる表情と目になり「いいのか？」と声に出さず訴える。

「気にしてはいないと言っただろ？ 後は自分自身で決めることだからザモリ」

会って間もなくここまで感情移入されているのは責任感というその壁が原因でありなのは達はそれを思いノゾムを心配していた、ノゾムは人間の優しさに触れていた、初めて会ったのにも関わらずここまで気に掛けてくれる彼女達の優しさに、

上層部の決定に従い自分を躊躇いもなく攻撃してきた局員達とは大違いだなと思い。

「ありが……」

礼を言おうとしたが突然警報が鳴り響きシグナムは「医務室に戻
てろ」と言い残すと部隊長室へ走って向かう。

工事現場、その地表が陥没しており二つの巨大な岩が見えていた。

「なんだろう……アレ」

機動六課はすぐに出動し地上にはフォワード陣四人、上空には隊長、
副隊長陣四人が飛行し辺りを監視。
シグナムのバリアジャケットはチャイナドレスのような感じで色は
ピンクで甲冑を着け、ヴィータは赤を基準にしたゴスロリの服、
エリオのは他のフォワード陣のように白のジャケット、中に赤いシ
ヤツで短パンという感じでキャラも同じような感じで胸元にリボン
が付き明るいピンクのもの。

「卵のようにも見えませんか？」

エリオとキャラからの視点だとただの巨大な岩のようには見えてい
ないようだ。

「卵……この二つで玉子焼き何個作れるかな？」

涎を垂らし、スバルはそう言う、隣には呆れて頭を抱えるティアナがいた。

「……………」

「どうしましたかシグナム？」

フェイトが考え込んでいるシグナムに話し掛けてみる。

「カザモリの事なのだが……………」

先ほど話した内容を三人に話しながら巨大な岩の監視を続ける。

「もしかしたら残るかもしれない、か」

「彼がそれでいいならそうさせて上げよ？」

そのフェイトの言葉を聞き頷くと地上で地響きが響く。

「地震!？」

「違う…………アレだ!」

スバルが指差す方には巨大な岩が、その二個ともガラスに罅が入るように割れていき最終的には卵のように割れて中から頭が足下に付いていて上に鞭のような尻尾が二本、顔にも見え緑色に輝く発光体が二つ付き背には緑色のトゲが無数生えた古代怪獣ツインテールが孵化し二つの卵から二匹現れた。

「怪獣が二体も出やがった!」

「確かアレは地球のドキュメントM A Tに記録が確認されてる古代怪獣ツインテール！ 水陸両用怪獣で水中戦はめっぽう強い怪獣だ！」

なぜかフェイトは怪獣のことに詳しくどという怪獣なのかまで言い当ててしまった。

「ここは工事現場、みんな、工事現場から怪獣を出さないで！」

なのはが指示をするとツインテールに対して攻撃が始まった。

最初になのはの砲撃が放たれツインテールAの胴体に直撃し大きく吹き飛ぶ。

「ギシャアアアアアーツ！！！！！！！」

ツインテールBは尻尾を振り回し上空のなのは達に向け攻撃を仕掛けるが隙が生まれ背中に。

「ハアアアアアアツ！！！！！！！！！」

魔力で形成された光の道、ウイングロードを出現させその上をローラスケート型のデバイス、マツハキャリバーで走るスバルが右腕に装着したナツクル、リボルバーナツクルで魔力を込めた力強いパンチでツインテールBを殴り飛ばす。

「まずは目を！」

ティアナの銃型のデバイス、クロスミラージュで精密な射撃をし倒れ込んだツインテールBの目を直撃させて潰す。

「エリオとキャラはフリードに乗って上空から援護を」

フェイトの指示に二人は従いキャラが使役する今はバックに入る程の大きさの白い竜、フリードリヒがキャラの魔法により元の10メートルぐらいの竜となり二人はその背中に乗り上空へ。

「ギシャアアアーツ!!!!!!」

起き上がったツインテールAはティアナがいる方へ前進していく。

「そうだ………… ツインテールの弱点は上半身の顔みたいな緑色に光る発光体が弱点だ!」

フェイトは思い出したかのように叫ぶ、ツインテールは緑色に光る発光体がレーザーの役割を持っておりそれを潰せば反応が鈍る。

「了解!」

ここでもティアナの精密射撃によりツインテールAの発光体を破壊するとそこから火が吹く。

「後は任せろ!」

ツインテールBはヴィータのハンマーのようなデバイス、グラーフアイゼンの重い一撃により少しずつ弱っていた。

レーザー器官が破壊され悶えるツインテールAの前にシグナムが剣型のデバイス、レヴァンティンを持ち構え。

「行くぞレヴァンティン!」

レヴァンティンが魔力を込めたカートリッジをリロードしていき一時的に威力を爆発的に上げ刃に炎が纏う。

「紫電……………！」

居合いの構えを取ると一気に駆け出すように飛びツインテールAに向かって突貫。

「一閃!!!!!!!!!!」

炎を纏ったレヴァンティンでツインテールAを一閃しその背後で静止すると。

「ギシヤアアアアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!?」

ツインテールAは断末魔を上げて崩れるように倒れ体を痙攣させるぴくりとも動かなくなり死亡。

「一体撃破！」

エリオが喜ぶがフェイトは何かを思い出せないでいた。

「ツインテールが現れた……………そしたら……………」

そしてようやくツインテールに関しての情報を思い出した。

「みんな気を付けて！ 敵はツインテールだけじゃない！」

その言葉で一瞬思考が止まると大地が揺れ砂煙を噴射しながら地底から二本の角、両手に鞭が生えた怪獣、地底怪獣グドンが現れた。

ツインテールはグドンを見た瞬間本能からか逃げ出そうとするがその方向は市街地でなのはの砲撃で吹き飛ばされた。

「地底怪獣グドン……… ツインテールの天敵………！」

グドンはツインテールを主食とする怪獣でその臭いを嗅ぎ付けこの場に現れたのだろう。

まずは倒された方のツインテールAに接近し噛み付いて補食していき、血飛沫を上げながら。

その光景をキャロは少し怯えていたがエリオが手を握り安心させようとしていた。

グドンは食事を終わると生きているツインテールBに矛先を向けて襲い掛かった。

「グオオオオオオーッ！！！！！！！！！！」

「ギシャアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！？」

「危ねっ！」

巻き添いを食らいそうになったがヴィータは二体から離れるとグドンとツインテールは戦い始めた。

「グドン………！！」

医務室の中でモニターから工事現場の様子を見ておりウルトラゼロアイを出していた。

(いいのか……………俺が戦って)

だがまだ迷いがあるらしくウルトラゼロアイを見つめたままだったがグドンが現れた事により雲行きが怪しくなってくる現場、

「くっ!」と言い放ってから医務室を出て行き人氣がない場所へ移動する。

「俺の力がみんなを守っていい力ならば、その力を貸してくれ、理由は……………俺に優しくしてくれたみんなを守りたいから!」

ウルトラゼロアイは展開、そして目に着眼。

「デユワッ!」

グドンはツインテールBに高速で鞭を叩き付けていきその為近付いたらグドンの鞭に当たりかねないため接近できないでいた。

「近付けねー!」

グドンはツインテールBの尻尾の付け根に噛み付き発光体は点滅、暴れるが放さず噛み続けているとツインテールBの動きが鈍くなっていき投げ飛ばされ。

「ギシャシャシャシャ……………!」

痙攣させると倒れ、ツインテールBも死亡しグドンは勝利の雄叫び

を上げ、工事現場から出ようと歩き出す。

「絶対工事現場から出すな！」

グドンの前方に隊長陣、背後にフォワード陣が回り射撃魔法や砲撃魔法を放つがグドンの進行は止まらず工事現場の敷地内から出ようとしていた、だが前にはなのはが立ちふさがり。

「なのは！ 下がれ！」

ヴィータの叫びを聞かず砲撃を放ち続けるがグドンは鞭を振り上げ下ろしてしまった、このままでは直撃コースだと回りは背筋が凍った、それはなのはも、一瞬スローな感覚に落ちグドンが鞭を振るうスピードが遅く感じたがそれでも感覚だけで違ったが……………

「デヤアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！」

天からの使者が雲を突き破って急降下しその勢いを利用しグドンにキックをぶちかまし大きく吹き飛ばして地上に砂煙を舞い上げ降り立つ。

「アレは！」

スバルは喜んだ、またあの戦士が自分達の前に現れた事を。

「ウルトラマン……………ゼロ！」

砂煙が晴れるとそこには膝を付いて右腕を横に上げ着地したゼロの姿が、立ち上がるとグドンの方を向いて。

「お前の相手は……この俺だ！」

戦う構えを取りグドンが立ち上がると走りだし接近し飛び跳ねて回し蹴りを横腹に打ち込む。

「グオオオオオーツ！！！！？」

横腹を抑え後退る、だがゼロの猛攻は収まる気配はなく右手でストリートパンチを放ち殴り飛ばす。

「ゼアアッ！」

そして左手でのパンチで繋げて右手で顎にアッパーと更に繋げる。

「強い……！」

エリオとキャラはゼロの戦いを直視するのは初めてで見惚れていた、それは同じ立場のウィータとシグナムもだ。

「グオオオオオーツ！！！！！」

鞭を振り回しゼロは距離を取るとエメリウムスラッシュをグドンの足下に放ち砂塵を舞い上げ目眩ましをする。

砂煙が晴れると目の前にゼロは居らずどこに行ったか辺りを見渡すが肩を叩かれ振り向くと。

「デヤアッ！」

顔面に裏拳を食らい吹き飛んだ、ゼロは高速移動でグドンの背後に回ったのだ。

倒れ込んだグドンの鞭に……

「ディバイーン……バスタアアアアーツ!!!!!!」

なのはが砲撃を放ち焼き切る。

ゼロはゼロスラッガーを持ち下を向いて両手も下げ静止する、風の吹く音が響く、グドンはゼロを待ち構えていた。

「っ!!」

そして走りだしグドンは鞭を振り上げるが。

「ゼアアッ!!!!!!」

先に右手のゼロスラッガーが一閃し鞭を切り飛ばし回転し右手を引いて左手のゼロスラッガーでグドンの腹部を切り裂きその背後で静止する。

グドンは口を動かし痙攣しておりゼロスラッガーは乱舞してから頭部に装着され。

グドンは大爆発を起こし四散した。

「よし!」

ティアナは小さくガッツポーズを取りスバルはジャンプして右腕を挙げて喜びエリオとキャロは手を重ね合わせて喜んでいた。

ゼロはなのは達に向け親指を立てサムズアップを見せる、夕日をバツクにし。

「ゼロ……」

ゼロは両腕を左右に広げるように挙げて飛び去っていった。

戦闘終了後、現場には副隊長のヴィータとシグナムの二人が残り後は帰還し少し調査をしていた。

「他に変わった様子はねーな」

「そうだな」

特に注意したのは卵があつた落盤した場所だが変わった様子はなく帰ろうとしていた。

「お前は先に帰っている、少し見回りしたら私も帰る」

「オツケー、先に上がらせてもらっぜ」

ヴィータはバリアジャケットを解除してその場から去った。

「さて……………見回りを……………ん？」

立ち入り禁止のはずの現場、なのに一人のスバルと変わらないぐらゐの歳の少年が立っていた。

「ここは立ち入り禁止のはずだぞ？ 何している？」

その少年に問う、その少年が振り向く、その顔を見て驚く。

「スバル……？」

少年の顔はボーイッシュなスバル似だった、髪の毛の長さは少し眺めで三つ編み、色も青く、瞳の色も深い青だった。
持ち物は一台のカメラだけだった。

「そこで何してる？」

「見つかったか……………見て分らない？ 撮影だよ」

少年はカメラのシャッターを切っていく。

「少しでも戦場の真実を知らない人達に教えていかないと……………」

シグナムは止めようとはしなかった、なぜか止められなかった、少年の目を見て悲しみを感じていたからだ。

「……………そっちにスバル・ナカジマって娘いるでしょ？」

「あ、ああ」

唐突にスバルの名前を上げてきた、続きを聞き。

「その娘の母親、クイント・ナカジマさんは生きている」

クイント・ナカジマ、スバルの母親だが数年前殉職したはずの人物のため驚きを隠せなかった。

「伝えておいて」

少年は去ろうとしたが呼び止められ名前を聞かれると。

「オレは……今はレン・ヒメやって名前、だけど……レン・ナカジマでもあるんだ」

それだけを言い残し去っていった、追う気にはなれずそのまま見送った頃には午後の8時は過ぎていた。

機動六課の本部、海側道にノゾムは立っていた、揺れる海を眺めていた。

「ノゾムくん」

呼び掛けられ振り向くとそこにはなのはが居りゆっくり近付いて隣に立つ。

「ありがとう、守ってくれて」

「別にいいさ、礼を言うのは俺の方なんだから」

ポケットに手をつっ込みもう一度海の方を向き一望する。

「なあ………」

そして今度はノゾムから声を掛ける、何か恥ずかしそうだった。

「何？」

「もし良かったらさ……………俺の……………友達になってくれない？」

それを聞き微笑むと「もちろん」と返し。

「けどどーしたらいいんだ？ 友達になるには……………」

「名前を呼んで、君とかお前、あなたとかじゃなくて名前で」

「名前……………」と小さく口にする。とノゾムも微笑み。

「わかったよ……………なのは」

「うん、よろしくねノゾムくん」

なのはが手を差し伸べるとノゾムは握手をするがまずは下に向いていた手を掴み次に上を向かせ握り放すと拳を一度ぶつけ、なのはは上、ノゾムは下と拳をぶつけ次はその逆をする。

「これは？」

「私の友達との挨拶のやり方、今どしてるのかな……………如月アスカくん」

T o b e C o n t i n e d . . .

STAGE 03【機動六課】（後書き）

フェイトは怪獣オタクで、これから現れて記録がある怪獣はどんな言わせようかと、前回言わせておけばよかった……………
次回はバカトラマンが（笑）

次回予告

ヒビキ

「バカもーん!!!!!!!!!!!!!!」

ユイ

「月面基地が謎の飛行物体による襲撃を受け増援を要請しています
！」

夢月

「アレは……………光？」

アリサ

「嫌な光ね……………」

アスカ

「ここでまだ死ねるかあああああああーっ!!!!!!!!!!!!!!」

夢月

「コスモス……………」

ダイナ

「やあああゝつてやるぜええええええええーっ！！！！！！！！！！」

次回『STAGE 04 新たな光と再会の光』

STAGE 04【新たな光と再会の光・前編】（前書き）

カップリングとかの話はお騒がせしました。

これからはやはりカップリングとかは独断で決めていきます。

登場怪獣

宇宙球体スフィア

合成獣ダランビア

超合成獣ネオダランビア

カオスヘッダー

登場

STAGE 04 【新たなる光と再会の光・前編】

ここはなのは達の宇宙にある地球の日本の富士山の近くの山岳地帯に設立されたタワー状の建物にドームを付けたようなスーパーGUTSの基地、グランドームがそこに在った。

そしてそのスーパーGUTSの隊員の一人、容姿は黒髪だが一部分に金髪が入った一般男性並みの長さで頬に傷がある青年がその隊員個人の自室のベッドで熟睡していた。

「ガゴォー！ ガゴォー！」

大きないびきを上げながらぐっすりと、ちょっとやそつとじゃ起きそうになかった、ベッドの隣の壁にモニターがあり時刻を表示しており08:12と表示されていた。

「ガゴォー！ ガゴォー！」

だが気付くわけもなくぐっすりと寝ていると。

「バカもーん!!!!!!!!!!」

画面は切り替わり中年の男性の姿が表示されその男性の怒号を浴び起床した。

「た、隊長！」

バツと起き上がりモニターの方を向く。

「今何時だと思っている!？」

「えっと……………7時ですか？」

まだ寝呆けているらしく画面の右上に表示された時刻を読めていなかった。

「8時だ！」

「えーっ!？」

「早く着替えて作戦室に来んかぁーっ！」

「ラジャー！」

返事返すとモニターがまた時計に切り替わり青年如月アス力はベッドから降りて灰色を基準にした制服に着替えるのだった。

「遅くなりました！」

「遅い！」

着替え終え作戦室に入室すると再び先ほどの男性の怒号を浴びせられる、この男性こそスーパージョウツ極東支部の隊長ヒビキ・コウスケ。

「お前は一体何を考えとるんだ！」

「ほとんど何も考えてません！」

「ばか正直に答えるなバカもん！」

朝から何度も怒号を浴びせられ完全に覚醒するアス力。

「隊長、それ以上怒るとまた血圧上がりますよ？」

「あ、すまんユイ」

オペレーター的女性隊員ミドリカワ・ユイがコーヒーを出すときそれを受け取り一口飲み落ち着きを取り戻す。

「明日こそは寝坊しないようにな」

「ラジャー」

不抜けた返事を返し説教は終わるのだった。

「アス力またなの？」

自分の席に座ると隣に座っていた先輩の女性隊員、セミロングで綺麗な黒髪が目立つユミムラ・リサが話し掛ける。

「ああ……目覚まし鳴らないんだよ」

「セットしてないだけじゃないの？」

「それ有り得るかも」

二人の間に通信機を頭に掛けたユイが入ってきて会話に参加、デスクに腕を置く。

「最近若い人でも忘れ癖激しい人いるんですよ、メモ取ってもそのメモどこに置いたかって根本的なところから覚えていない人も結構」
「マジで？」

ユイは頷きお茶を飲んでいると頭を軽くフアイルで叩かれる、振り向くとそこには肌が色黒の男性、副隊長のコウダ・トシキがいた。

「喋ってないで仕事しろ」

頬を膨らまして「ラジャー」と答え部屋の奥のデスクに座った。

「お前達もだからな」

最後にアスカとリサにも注意して席に着いた。

後二人、ふつくらした体格の男性隊員、主に様々な学科に精通する科学者のナカジマ・マコト隊員と射撃の名手で考古学のエキスパート、サバイバル戦が得意のカリヤ・コウジ隊員がいる。

するとアラートが鳴り響きユイがキーボードを高速で打つ、コンピユータのエキスパートでそれに携わる検定を幾つも持っている。

「隊長！ TPC月面基地が謎の飛行物体による襲撃を受け増援を要請しています！」

「わかった！」

隊員達は立ち上がりヒビキの方を向く。

「ガッツイーグルで月面基地に向かう、スーパーGUTS、出動！」
ヒビキの指示に隊員達は「ラジャー！」と返しユイ以外の隊員達は
作戦室から出た。

グランドームのシャッターが左右に展開し中からカタパルトが前へ
スライドしその上に赤と青と黄色の三機の戦闘機が合体した機体、
ガッツイーグルが乗っており。

「ガッツイーグル、発進！」

エンジンに火が点きガッツイーグルは離陸し飛翔した。

「ネオマキシマエンジン出力安定、いつでも大気圏を越えられます」
ナカジマがモニターを見て伝えるとヒビキは頷き。

「よし、一気に大気圏越えるぞ」
『ラジャー！』

機体はゆっくり上へ向いていき上昇していきガッツイーグルは大気
圏を越えていった、その様子は東京からも見えていた、ガッツイー
グルのエンジンから放たれる光が空を越えるところを。

「ガッツイーグル………」

なのは達が子供時代住んでいた町、海鳴市でも見えておりその住人では今はSRC宇宙開発センターパイロット候補生、容姿は短い薄い茶髪で幼げな顔付きの青年、はるのむつき春野夢月が見ていた。今は休みのため故郷に帰ってきていたのだ。

「夢月〜！」

金髪の髪の毛の女性と紫の長い髪の毛にカチューシャを掛けた女性がやってきた。

「アリサにすずか！」

幼なじみで金髪の女性はアリサ・バニングスとカチューシャの女性は月村すずかである。

「帰って来てるなら挨拶ぐらいしなさいよ」

「そーだよー」

「ごめんごめん」と二回謝ると再び空を見る。

「単体で大気圏越えられるのはガッツイーグルぐらいだからスーパーGUTSが出動したと思うんだ」

「確かアスカが入隊してるのよね」

「そうだよ、アスカくん、大きくなったらGUTSに入るって言うてたからね」

GUTSとは、スーパーGUTSが結成される前の地球平和連合TPCの直属の防衛チームである。

SRCとは元々は民間の機関だったが怪獣保護や宇宙開発の実績が認められ活動は地球規模に広がり怪獣保護チーム、チームEYES

が結成されている。

「宇宙で何かあったのかな？」

「じゃないの？」

宇宙で事件が起きた、そう話していると宇宙飛行士を夢見る夢月は首に掛けた紐で結んで固定した不思議な青い石、輝石を見て「コスモス………」と静かに囁く。

「最近おかしいわよね」

「うん、それとまた空間転移した町が出てきたみたいだよ？」

「うそ、それホント？」

すずかは頷いた、最近この地球上で異変が起きておりそれはこの地球上にあるはずがない地域や町、山や施設があつちこつちに転移してきているという事件が起きていた。

TPCとSRCはそれに今頭を悩ませておりその一帯を立ち入り禁止にしたりとし混乱を避けており調査隊がそこに訪れ町の住人に事情を聞いたりと大忙しで異世界から転移してきたと二つの組織は発表している。

今でも対応に困っているためニュースなどはその話で持ちきりだった。

「一体何が起きてるのかしらね」

「だよな………その人達とも仲良くできればいいのに」

「夢月くんは平和主義者だからね」

もう一度輝石を見ると空を見上げ。

（コスモス………今君はどこにいるんだ………）

空を越えたもつと先、黒い空間の中に無数の星々が浮かび輝く宇宙空間、太陽系を更に越えた先では白い球体が無数飛んでいた、これが月面基地を襲撃している宇宙球体スフィアだ。

スフィアは太陽系に向かうが後ろからある者に追跡されていた、青き体に銀色のライン、乳白色に輝く二つの目に胸にカラータイマーの青い光が輝くウルトラマンコスモス・ルナモードが両手を広げ追跡していた。

（まさかスフィアが……………カオスヘッダーも追跡していたが見失い……………くっ！）

心中で毒づいているとスフィアは緑の光線を放ってきたため横に傾き避けると加速しスフィアに追い付こうとしていたのだがその間に。

（何！？）

光の粒子の塊が通り過ぎコスモスとスフィアの距離を離し、スフィアは太陽系内に侵入してしまった。

（カオスヘッダー……………！）

光の粒子の塊、カオスヘッダーも太陽系内に侵入しそのまま青く輝く小さな惑星……………太陽系第三番惑星地球へ進路を向けていた。

（くっ……………）

スフィアは見失ったがカオスヘッダーなら追跡できる、コスモスはカオスヘッダーの追跡を優先した。

「シェアッ！」

カオスヘッダーは真っ直ぐと地球へ向かっていた。

TPC月面基地ではスフィアの襲撃を受けていた。

対空防衛システムが作動しており光線砲やミサイルランチャーが地下から上がっておりスフィアに攻撃するが効果はなく次々と破壊されていくと赤いビームと青いビーム、黄色いレーザーが放たれスフィアを撃墜していく。

「来てくれたか、スーパーGUTS！」

基地の司令官がそれを見て声を上げた。

ガッツイーグルが分離し赤い小型高速戦闘機 号とバランスに勝れた青い 号に黄色い高火力戦闘機 号が駆け付けレーザー攻撃を仕掛けていた。

「月面基地確認、かなり消耗しているようです」

「分かった、職員達に脱出ができるように指示しておいてくれ」

「ラジャー」

ナカジマは月面基地に通信を繋げた。

「相手は何者なのかは知らないがいきなり攻撃を仕掛けてきた奴等に遠慮する必要はない！」

号にはナカジマ、カリヤ、コウダ、ヒビキが搭乗している。

「もちろん！ 人類がロマンを求め宇宙に進出するための施設を破壊した責任、取らせてやる……！」

号にはアスカが、号にはリサが搭乗。

「熱くなってますね、アスカ」

「アイツにとって宇宙は特別な場所だからな」

アスカはスーパーGUTSの隊員の中では新人だが出撃は何回かしているため実力があるは確かである、だがすぐに熱くなるためそこが傷である。

「アスカ！ 熱くなりすぎるなよ」

「わかってますよ隊長！」

号が先行しレーザーでスフィアを攻撃していく。

「わかってないじゃないの…… 号、攻撃します」

リサもトリガーを引いてレーザー攻撃を仕掛ける。

「ん！？ 隊長！」

ナカジマが慌てて話し掛けた。

「火星にも同じ飛行物体が飛来して火星基地が襲撃を受けているようです！」

「まさか……………コイツは囷……………」

この中で足が速いとさたら 号、次に 号である。

「アスカ、リサ、お前達は急いで火星基地に向かってくれ！ ここは俺達が食い止める」

『ラジャー！』

号と 号は火星へ進路を向け飛んでいくがスフィアが行かせまいと追撃するが 号のビーム攻撃で阻まれる。

「ここから先は行かせん！」

スフィア達の前に飛ぶ、危険な行動だが二人を火星に行かせるためである、だがその危険な行動にも関わらずスフィアを打ち落としていくのはベテランで隊長であるヒビキの実力だろう。

「隊長、衛星基地フィフスルナからガッツウイング1号の編隊が増援に」

「先に来なければならぬ部隊なのだが……………ここは奴等に任せ俺達も火星に向かうぞ」

号も火星に進路を向け飛んでいき後は黄色い小型戦闘機ガッツウイング1号の編隊にスフィアを任せた。

火星では、その赤い大地に設立された施設を茶色く体が岩石のように体格が蜘蛛のように歩く三本足の怪獣、合成獣ダランビアが口からオレンジの光線を放ち他のスフィアと共に襲撃していた。そこに 号と 号が大気圏内に突入に火星の中に、二人はダランビアを肉眼で確認すると攻撃を開始するが。

「バリアだと!？」

「あの種類は亜空間バリアーね」

空間を形成するエネルギーを利用し形成し作り出して回りに張る亜空間バリアーで攻撃を防いであった。

「どうする？」

「四方も守られてるみたいだけど下は守り切れないみたい」

「それじゃ俺が奴の足を上げるからリサが一発かましてくれないか？」

「その話、乗らせてもらっわね！」

号と 号がダランビアの前を通り過ぎるとUターンし 号が先行し飛行する。

「足を上げな！」

レーザーを打ち込むとダランビアは 号がぶつかるかと思い足を上げるが 号は上昇して加速。

「そこよ！」

そこに 号の機首の砲門からガイナーと呼ばれる黄色い破壊光線が発射されダランビアのバリヤーが張られていない下部に直撃。

「ギシャアアアツ！！！！！！？」

ダランビアは悲痛な声を上げ横に倒れ込み弱点を丸裸にする。

「リサ、俺が飛行物体の相手するから起き上がれなくなった亀を」「ラジャー！」

号はスファイア、 号はダランビアを。

ダランビアにガイナーで攻撃を加えていき足を動かし悶える。

「ほお、結構もう片付けてるじゃないか」

号が到着するがほとんど片が付いており。

「これで、終わりよ！」

最後にミサイルを発射しダランビアに直撃、ダランビアは四散して残骸が辺りに飛び散る。

「よしー！」

号の目の前に最後のスフィアが。

「これで……………仕舞いだ！」

レーザーで最後のスフィアを打ち落とした。

「よし、よくやった」

ヒビキが声を掛けるのだがまたもやナカジマが慌てだす。

「隊長！ 怪獣の死骸からまだ生命反応が！」

「何だと？」

「隊長！」

カリヤが声を上げるとダランビアの死骸は一つになっていき回りの岩石を吸収し二足歩行の怪獣、超合成獣ネオダランビアとなり蘇った。

「もっと巨大になっただと！？」

ネオダランビアは雄叫びを上げると足を大きく上げて一歩踏み出し前進していく。

「各機前方に回って総攻撃だ！」

『ラジャー！』

その頃地球の海鳴市、夢月とアリサ、すずかは昔話に花を咲かしていた。

「そう言えばさ、なのはとはやてって海外に進学したみたいだけどどうしてるの?」

「あ……………最近連絡取ってないから……………」

なのは達は進学したことになるらしく異世界で魔法使いとなっ
っているとは知らないらしい。

「夢月は何してるの?」

「毎日空飛んで小笠原諸島の怪獣保護センターに行ったりも」

「アンタはホント怪獣好きよね」

「夢月くんは怪獣が恋人みたいな感じだからね」

すずかの言葉に何も言い返せず苦笑するだけだった。

「だけどみんなに会いたいな……………アスカにも、なのはやフェイト、
はやてにも」

空を見上げていると飛行機雲のような形の光に目が入る。

「アレなんだろう?」

アリサとすずかも空を見上げその光を直視する。

「綺麗な光だね」

見た目だけの感想をすずかは述べるが。

「だけど……気持ち悪い光……」

「なんで？」

「分からないわよ、だけど感じからして……」

それは夢月もだった、胸が熱いと思い輝石を手の平に乗せると輝石は淡く、青く光り輝いていた。

「輝石が……」

大変な事件が起こるのではないかと不安な気持ちになっていくのだった。

「まさか地球に……」

宇宙から見ると網のように光の帯が張り巡らされていた、その光はすべてカオスヘッダーである、コスモスは地球の目の前で静止し。

「夢月……シエアッ！」

コスモスはまだ大気圏内に入らずに地球の回りを飛ぶのだった。

そして火星、基地はネオダランピアによりほぼ破壊されてしまい、スーパージョーエースも消耗していた。

「くそ……！」

号はネオダランビアの光線を直撃してしまい墜落、残るは 号と号だった。

「ギシャアアアッ！！！！！」

ネオダランビアは光線で完全に基地を破壊してしまった。

「基地が……コイツ！」

「アスカ！ 無茶するな！」

号は突貫しレーザーを発射していくが亜空間バリアーですべて防がれ、ネオダランビアは光線を放ち小さな右翼に直撃。

「うわあああああつ!!!!!!?」

「アスカアアアアアアーッ！！！！！！！」

機体は回転しどんどん高度が落ちていきその直前に岩山が、このままでは激突し命はない。

アスカはここで死んでしまうのかと思った、このまま怪獣を野放しにしたまま。

だが諦められなかった、アス力は諦める事が一番苦手で嫌いだからだ！

「ここでまだ……死ねるかあああああああーっ！……！！！！！！」

その叫びに何かが反応したのか、コックピット内に光が溢れる。

「なんだこれ……」

完全にコックピットは光に包まれると 号は岩山に激突し爆発。

「アスカ……！」

リサや他の隊員達も何とも言えない表情となりアスカの生存は絶望的だと思っていた矢先だった。

ネオダランピアの前に光が現れた、まるで柱のように。

「あれは……………」

「すごい量の光エネルギーです！」

「まさか……………」

何かを悟りリサはこう言った……………「光の……………巨人……………」と。

光が消えるとネオダランピアの前に銀で金色の大きな溝があるプロテクターに金色の淵の青く輝くカラータイマーに乳白色の二つの目の額の菱形の金色の淵に囲まれたクリスタルに体は銀を基準に赤と青の模様の光の巨人が立っていた。

「ティガか？」

ヒビキが口に出したティガとは、今から7年前、旧GUTSと共に世界を闇から救った光の巨人、ウルトラマンティガであるがこの巨人は違う。

（なんだよこれ……………）

そのウルトラマンは手の平を見て戸惑う、そうこのウルトラマンはアスカが変身したもの、突然自分の姿が変わった事に戸惑いを隠せずにいたがネオダランピアの雄叫びを聞き今は迷っている暇はない、それを感じたウルトラマン……………ウルトラマンダイナ・フラッシュタイプは。

「なんだかわからなーけど迷ってる暇はないな……………」

拳を鳴らし首の骨も鳴らすと。

STAGE 04【新たな光と再会の光・前編】（後書き）

やはり次回に持ち越し（笑）

因みにアスカのファミリーネームの如月はフォーゼから（笑）

次回予告

ヒビキ

「まるで野球だな」

アスカ

「俺は………一体………」

吹雪

「早く映像出せ！」

夢月

「SRC宇宙開発センターパイロット候補生、春野夢月です！」

アスカ

「俺は何の変哲もないただの人間なんだよ………」

夢月

「僕は真の勇者になりたいんだ！

ウルトラマン……コスモオオオオオオース!!!!!!!!!!!!!!
」

次回『STAGE 05 新たな光と再会の光・後編』

STAGE 05【新たな光と再会の光・後編】（前書き）

何かもう一体出す度に帰りマンの怪獣が出ますねえ！

登場怪獣

凶暴怪獣アーストロン

超合成獣ネオダランビア

カオスヘッダー

友好鳥獣リドリアス

カオスリドリアス

登場

STAGE 05【新たなる光と再会の光・後編】

前回、月面基地に謎の飛行物体スフィアが襲撃しスーパーGUTSが出勤するが火星にも現れ如月アスカ、ユミムラ・リサ隊員が最初の火星へ行きダランピアと戦闘し倒すがネオダランピアとして復活してしまう。

そして地球では謎の光が地球全体を被い春野夢月はただならぬ気配を感じ不安な気持ちに見舞われるのだった。

そしてアスカが乗る 号はネオダランピアに撃墜され岩山に機体をぶつけ爆発、生存は絶望的だったがアスカは突然ウルトラマンダイナに変身してしまうが戸惑いつつネオダランピアと戦うのだった。

「ショワッ！」

ウルトラマンダイナ・フラッシュタイプはまるで野球でサードから全力疾走をするかのように走りだし飛び込みネオダランピアに食らわせホームベースのキャッチャーを吹っ飛ばすようにタックルを食らわした。

「ジュワッ！」

右足を一歩下げ構えると今度は横にジリジリと盜塁を狙うかのよう
に動く。

「まるで野球だな……」

ヒビキはそう呟いた、墜落した号からヘルメットのバイザーを下ろしマスクや酸素ボンベを装備しXXバスー力を担いだリサが降りてくる。

「ウルトラマン……」

ダイナは手から青い手裏剣光線、ビームスライサーを一発放つが亜空間バリヤーで防がれてしまう。

（やっぱりあのバリア邪魔だな……）

どう打開するか考えるがそんな暇を与えてくれるはずなくネオダラ
ンビアは腕を数十メートルも伸ばしダイナの腰に巻き付けた。

「フッ！？ グワアアアアアアアアーツ！！！！！！！！！！」

そこから電流を流しダイナを苦しめていく、鼻先からオレンジ色の破壊光線を放ち身動きが取れないダイナに追い討ちを掛けていく。

「グウウウツ!!!?」

ダイナのピンチだ、どうなる！？

「ギシャアアッ！！！！？」

そこにネオダランビアの頭部に火花が散った、それはリサがXXバズーカで頭部を狙い射ったのだ。

拘束から逃れたダイナは肩で息をしているとカラータイマーが点滅を始め活動時間が残り僅かとなる。

「ショワッ！」

もう一度ビームスライサーを放つが亜空間バリヤーで防がれる、常時展開しているわけではないようだ、先ほどリサの砲撃を受けたように。

「ハアアアアアア……………ディアッ！！！！！！！」

両手を円を描くように大きく回し青い光の輪が現れ両手に集結し前に向けると青い帯の光線フラッシュサイクラーが放たれネオダランビアの亜空間バリヤーを突き破った。

「今だああああああーっ！！！！！！！！！！！」

ヒビキが叫ぶとそれに答えるかのように腕を十字に組んで青い破壊光線、ソルジェント光線が放たれネオダランビアに直撃しオレンジの光の輪が直撃した部分から現れ光線が止まると輪はその部分に戻りネオダランビアは粉々に吹き飛び今度こそ倒された。

「すごい……………アレがウルトラマンの……………力」

その力を目の当たりにするのは初めての彼等にとっては衝撃的だった

た。

ダイナを光の渦に包まれると等身大サイズとなっていきアスカの姿に戻った。

「俺は………一体………」

いつの間にか酸素ボンベやマスクもしてあり宇宙装備はバッチリだった、戦いが終わり冷静となりダイナの姿から戻ったアスカは激しく動揺していた。

「俺が………光の巨人………そんなバカな事………」

足下を見ると茶色い手で握れるアイテムを見付け拾うとそれに顔みたいなものが彫られた、リーフラッシャーというアイテムだった。

「アスカ!」

「リサ………」

リーフラッシャーをポケットにしまつとリサが駆け寄り、そして近くに 号が着陸するのだった。

地球上を光が被った時、小笠原諸島にある怪獣保護センターの近くの海域にある人工島、チームEYESの秘密基地トレジャーベース。チームEYESはその光を調べに入っていた。

「綾香！ 早く映像出せ！」

チームEYESの制服は水色を基準にしたものである。

ここはトレジャーベースの作戦室、TPCのエースパイロットでSRCに引き抜かれたチームEYESのパイロット、吹雪啓輔ふぶき けいすけがオペレーターもりもと あやかの森本綾香に急かさせる言葉を掛ける、光が被った事で危機感を覚えているのだろう。

「やってまーす、もうせつかちなんだから」

ほおを膨らましながらキーボードをカタカタと打つていくとモニターに各国で撮影さるている光が映し出される。

「これが……………すぐに調べます！」

メガネを掛けた太った男、土井垣努どいがき かつむがその光を様々な機器で調べる。

「一体、何なのこの光は」

チームEYESの副隊長、吹雪と同じようにTPCから引き抜かれ

みずきしのぶ
た水城忍リーダーがモニターを見ていると扉が開きチームEYES
ツブ ひつら だいすけ
隊長、日浦大輔が入ってくる。

「状況は？」

「地球を被う光はまだ消えず輝きを維持したままです」

すると結果が出てモニターに表示され土井垣が説明に入る。

「判りました！ この光は粒子の一粒一粒が生きているんです！
言わば………光のウイルスです！」

「アレが………生物………」

すると光から雪のように光の粒子が一定したポイントに降り注ぐ、
太平洋、大西洋、各国の山岳地帯に森林地帯、もしくは市街地があ
る自然が豊かな場所や怪獣保護センターにも。

「一体………何をやっているんだ？」

海鳴市、夢月達は辺りに降り注ぐ光を見て綺麗だと思うが。

「ただの自然現象じゃない………意思みたいなものを感じる………」

………
「怖いわね………」

次第に光は消滅していき何事もなかったように静けさが戻った。

「消えちゃった……………」

「あ、ああ……………」

輝いていた輝石の光も消えていた事に気付いた。

「夢月くん、ずっとそれ持ってるね」

「まあね、これ僕とコスモスとの友情の証だから」

10年前、この地球に母星を失った過去に幾度なく侵略に襲した宇宙人の同種族のバルタン星人が飛来したが違ったのは彼に命を愛しむ心があったこと、だが地球を乗っ取ると計画していたバルタン星人はコスモスに追跡されていた、その時に同士討ちとなり地球上に落下したコスモスは夢月と出会い友情の証として青い石、輝石を受け取ったのだ。

「コスモス……………この宇宙のどこかで何してるんだろう……………」

輝石を太陽の方に向けてそれを見る。

そして数日後、開発センターに戻った夢月はコアモジュールSSという水色の小型機に乗り小笠原諸島上空を飛んでおり怪獣保護センターがある島へ向かっていた。

「池山管理官、応答願います！」

怪獣保護センターの管理官の池山に通信を送るとすぐにモニターに

口の回りに髭を蓄えた中年の男性が映った。

「よく来たな夢月！」

「はい！ ん？」

島はシールドで守られておりその一部分に穴を空け入るのだが横を飛ぶ大型の機体があった。

「チームEYESのテックサnder1号……………」

それはチームEYESが所有する夢月が乗る単座のコアモジュールSSと同型だがこれは三名搭乗できるオレンジのコアモジュールをベースにし合体した白いボディに赤いラインが入った超高速機テックサnder1号だった。

二機は怪獣保護センターに入っていく誘導に従い着陸した。

「日浦キャップ！ また新しい怪獣でも連れてきたのかい？」

池山は外に出てテックサnder1号から降りた日浦と吹雪を迎える。

「いえ……………今回は調査に……………」

「調査？」

トロイBから夢月も降りてきて調査する理由を聞きあの空を被った光が原因だと知る。

「そういう事が……………」

「そちらは？」

日浦は夢月に話を振るうと。

「SRC宇宙開発センターパイロット候補生、春野夢月です！」

人差し指と中指だけを伸ばした敬礼をし所属と名前を紹介する。

「SRCの人間なら知ってるだろ？ 怪獣大好きで有名な奴」

チームEYESの中でも夢月は有名らしく日浦はなるほど頷いていると。

「よく島をうろちよろしてる暇なパイロット、か」

「やめないか吹雪」

吹雪はその名の通り冷たく言い捨て注意を受ける。

「そつだ………様子が変だしたらリドリアスの様子が変なんだ」

「リドリアスが！？」

鳥の怪獣、友好鳥獣リドリアス、この島の中にいる怪獣の中ですごくおとなしく夢月に懐いている怪獣である、そのためリドリアスを心配せずにはいられなかったのだ。

四人はすぐにリドリアスの巣へ向かった。

今から数時間前のスーパーGUTS基地の作戦室では火星に現れたウルトラマン、ダイナの話でユイが盛り上がっていた。

「GUTSに残る記録だとウルトラマンは光で人類を導く存在って記載されてる」

ナカジマはTPCのデータベースを見て伝えたとアスカは小さく「俺はそんな大層なものじゃ……………」と戒める言葉を言う。

「アスカ、さつきから何ばやいているの？」

「あ、なんでもない」

「ねえねえ！ 名前付けない！？」

ユイのテンションは高くまるでダイナに一目惚れしたような感じだった。

「名前？」とカリヤは返し。

「わたし考えたんだけど！ ダイナミックのダイナでウルトラマンダイナってどう！？」

「ダイナ？」

他にも名前があるらしいがユイはダイナがいいと言い張り。

「アスカもいいと思わない？」

「ん？ ダイナ……………いいんじゃない？ 俺は気に入ったよ」

自分もその名前が気に入るユイの考えた名前に賛成しウルトラマンダイナとなった。

部屋にヒビキが入ってきてアスカを手招きする。

「どうかしましたか？」

「いや……………ちょっとあんな墜落してよく生きてたなと思ってな、お前も入隊から一ヶ月、余り休まず頑張ってたからな、休暇を与え

ようと思つてな」

「休暇つすか？」

「ああ、今日明日故郷にでも帰ってゆっくり羽を休めてこい、これは命令な」

「ラジャー」と快く返しその日アスカは休暇を与えられることに。そして現在、アスカはスーパーGUTSの戦闘車両、銀のボディと赤いラインにルーフ上に設けられたビーム砲、ゼリアン砲が装備されたゼレットに乗り海鳴市を走っていた、車両とかはプライベートでも自由に使ってもいい事になっている、それはいつでも仕事に復帰できるようにという考えである。

（俺が人類の救世主だなんて……………そんな大層なもんじゃねーよ、他にもいい奴いたはずだろ……………）

横断歩道の前で停車すると窓を叩いてくる者が。

「ん？ あ」

横を向くとそこにはアリサとすずかが手を振っていた、後ろの扉を開くと二人は乗車する。

「Hello 久しぶりだね〜ア〜スカ」

「久しぶり、アリサ、すずか」

アスカもなのはやアリサ達とは同級生で幼なじみで仲がいいのだ。

「今日お休み？」

「まあ……………」

信号が変わり走りだしどこまで走ればいいか聞いてみると取り敢えず走ってと返されたため走る。

「この前は夢月が帰ってきたわよ」

「夢月が？」

「そ、みんなに会いたがつてたわよすごく」

ずっと走っているのもつまらないからアスカはある場所に向かった。

「ここで茶でも飲むか？」

「飲む飲む」

そこは喫茶翠屋、なのはの実家の店である。

「じゃあ今日は俺が慢ってやろう」

「ありがとアスカくん」

「Thank you アスカ」

「いやいや」

頭を掻きながら照れていると。

「あ、私は席離れてお茶飲んでるから二人は一緒の席でゆっくり話してて」

「え？ ああ………そうさせてもらおうかな？」

「悪いわねすずか」

すずかはなぜ二人に気を使ったのか、何を隠そうアスカとアリサは恋人同士なのだ、一応すずかにも好きな人がいないわけではないがこの日本にはいない、アメリカのハーバード大学に進学している天才なのだ。

「すずかも頑張れよ、深紅の事」

「頑張りなさいよ」

「ありがとうアスカくん、アリサちゃん」

三人が喫茶翠屋に入店した頃、夢月達は友好鳥獣リドリアスの巣が見える崖の上へ、巣には姿が水色っぽい体色に黄色い嘴、赤い鶏冠に閉じた長い羽根のリドリアスが叫ぶように鳴き声を上げていた、その鳴き声は荒々しかった。

「あんなにおとなしかった奴がなんでこんな……………」

まるで恋人や友達を心配するような雰囲気のリドリアス見る夢月に日浦が声を掛けた。

「本当に君は怪獣が好きなんだな」

「はい、怪獣もこの地球上で生まれた動物ですから、暴れるのも地球環境を破壊し続けた所為という説もありますから何から何まで怪獣が悪いという事はないんですよ」

自分の怪獣に対する価値観を語り始めた、その考えを聞くと本当に怪獣が大好きで仕方ないんだなと思っていると吹雪が。

「だがどんなにおとなしい怪獣がいてもほとんど凶暴な怪獣ばかりだ、宇宙怪獣はすべて破壊が目的で飛来してきた」

吹雪はその考えに冷ややかだったが、吹雪にも考えがあるからだ、その事はまだ語らなくてもいいだろう。

「確かに……………そうですね……………分かり合えないって事はないと

思っんです!」

その意志が強い言葉に次に何を言い返せばいいか迷う吹雪、だが突然リドリアスは羽根を広げ飛翔してしまった。

「リドリアス!?!」

「キャップ! 首の回りに光が!」

飛び回るリドリアスの首の回りには光の帯が巻かれていた、それが原因で荒々しくなっているのだろっ、リドリアスは低空で飛行し四人は吹き飛ばされ掛ける。

「リドリアス!」

起き上がると夢月は輝石を繋いだ紐を回し不思議な音を発する。

「アレは?」

「リドリアスは……あの音が好きなんだよ」

だがリドリアスにはその音が耳に入らず上昇してシールドに引っ掛かるがそのまま突き破ってしまい島の外へ。

「リドリアスウーッ!」

夢月は急いでコアモジュールSS所へ走って向かう。

チームEYESの隊員達が全員が左腕に装着している腕時計型の通信機器EYESペーサーを使い。

「忍、土井垣! 至急テックサンダー2号でリドリアスを追跡!

俺達も後を追う、綾香はリドリアスの進行方向がどこか調べてくれ
！」

『了解！』

指示をし終わると日浦と吹雪もテックサンダー1号を着陸させた場所へ、走りだすと先に夢月のコアモジュールSSが離陸しリドリアスが空けた穴から外へ出た。

「まさかアイツ…………リドリアスを！」

「急ぐぞ吹雪！」

「了解！」

「怪獣警報？」

海鳴市、アスカ達は喫茶翠屋から出た後だった、町中に警報が響き渡っていた、それは怪獣警報というものだった。

「ユイ！」

アスカはスーパーGUTSが使う通信機W・I・T・Iを持ちカバー

を開きグラウンドームに繋げる。

「あ、これわたし達の管轄じゃないから大丈夫、チームEYESの管轄になったから」

「チームEYESの？」

「アスカ！」

アリサが指を差す方にリドリアスが飛翔しており海鳴市に降り立ってしまった。

「確か怪獣保護センターに保護されてるリドリアスって怪獣だぜ？」

「ねえねえ！ その隣の娘アスカの彼女？ ねえどゥ」

ユイは管轄外という事をいい事に問い質そうとしたがアスカは通信を切った。

「いいの？」

「構わねーよ、あのチビの話に付き合っの疲れるんだよ」

リドリアスは苦しいのか悶えているとテックサンダー1号と2号が到着、コアモジュールSSはやはりテスト用だからか飛行速度は二機より劣っているため遅れていた。

「テックサンダーか……1号速いんだよね」

「そんな事言っでないで早くあたし達を避難所に連れていきなさいよ」

「ラジャー」

アスカはゼレットで二人を避難所まで連れていった。

「クエエエツ！」

泣き叫ぶように鳴き声を上げていると目が赤く光りだし頭部と腕が変化してしまった、紫の突起物が生え嘴はより長く鋭くなった頭部に腕は二本の長い爪が生えたカオスリドリアスに、そいリドリアスはカオスヘッダーに寄生されていたのだ。

「リドリアスが……別の怪獣に変化したあ！？」

土井垣は急いでリドリアスがカオスリドリアスに変化してしまったメカニズムを調べるべくアナライズに入る。

「ギシヤアアアアアアア―ツ!!!!!!」

カオスリドリアスはおとなしいリドリアスより凶暴化し口から青白い光線を放ちビルを破壊し始める。

「リドリアスが！」

カオスリドリアスはもっと市街地のど真ん中に侵攻しようとして一歩ずつ前進していく。

「キャップ、捕獲は諦めましょう」

吹雪はこのままでは人的被害が出ると考え提案するが日浦は諦めきれなかった。

そこにコアモジュールSSが到着しカオスリドリアスの前に回り込む。

「あの怪獣バカ、何やるつもりだ！」

コックピットが開き夢月は直でカオスリドリアスを直視する。

「リドリアス……酷い姿になっちゃったな」

カオスリドリアスは夢月を見て足を止めていた、懐いていた彼の事を忘れたわけではなかったのだ。

夢月は輝石を振り回しあの不思議な音を鳴らす、今度はその音はカオスリドリアスの耳に入っていた。

「頑張れ！ リドリアス！」

カオスリドリアスは鳴き声を上げる、苦しうだがそれはカオスヘッダーの呪縛から解放されるために戦っているのだ、次第にカオスリドリアスは元のおとなしいリドリアスに戻った。

「クエエエエ」

「よし！ 頑張ったな、リドリアス」

コックピットを閉じコアモジュールSSは上昇、リドリアスはそれを追い掛けるため飛翔した。

「アイツ……リドリアスをおとなしくさせやがった……」

「怪獣保護の才能あるかもな」

日浦は夢月の能力とその思いを買っていた。

「リドリアスがおとなしくなったみたいだな」

「そうね」

避難所がある丘に到着したアスカとアリサとすずか、そのままリリアスが怪獣保護センターに帰るものだと思っていたが……
突如大地が揺れ始めた。

「何が起きてるの!？」

その地震は激しく立っているのがやっとだった、すると大地が割れ、地底から頭部に生えた長い角に黒い巨体の凶暴怪獣アーストロンが現れた。

「アーストロンだと!？」

「SRCでもその凶暴性から保護を断念している特A級の凶暴怪獣!」

怪獣にも保護できるものとできないものに分けられており基本的に初めて現れる怪獣やおとなしい怪獣はチームEYESが保護するが過去に現れたことがあり記録に危険と記されている怪獣はスーパージョウが対処する事に、
それにもランクがありS、A、B、C、D、EとありBまでならまだ保護できる余地がありがA以上はできないとSRCとTPCが判断している、アーストロンはそれに当て嵌まるのだ。

「グオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

アーストロンは雄叫びを上げると口から赤い熱光線、マグマ光線を放ち町を破壊していくがコアモジュールSSらのエンジン音や機動音が気に入らないのかそれらを睨み付けると空へ向けマグマ光線を発射してしまった。

「くっ!」

テックサンダー二機はマグマ光線を避けたが。

「うわあああつ!!!!!!?」

コアモジュールSSに直撃してしまいコックピット内に火花が散り機体から炎が上がり墜落していく。

「ギシャアアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

それを見たリドリアスは怒りに駆られてしまいカオスリドリアスに戻ってしまい地上に降りアーストロンに光線を放ち攻撃していく。

「リドリアス! やめろ!」

夢月の叫びは届かずカオスリドリアスはアーストロンと激突し取っ組み合いに。

「リドリアスウツ!」

リドリアスの名前を叫んだ瞬間、上空から光の球が落下し墜落するコアモジュールSSを包み込みそのまま山岳地帯に墜落し爆発した。

「夢月!」

日浦は思わず名前を叫んだ、彼はチームEYESに必要な人材だと感じたからだった。

「あんやろっ………！」

アスカはゼレットに乗車しアクセルを全開にしタイヤは一時空回りするが数秒後走りだし市街地へ。

「アスカ！」

アリサが呼び止めるがその声は届かなかった。
ゼリアン砲を機動しアーストロンに向け青い光弾を放って攻撃していく。

「アスカ」

ゼレットのモニターにヒビキが映し出される。

「すみません、説教は後で聞きますから！」

「いや、先ほど正式にアーストロンへの攻撃命令が出た、そっちにコウダ達がガッツイーグルで向かっている、到着するまで何とか凌いでくれ」

正式な命令が出たとの通信だった。

「ラジャー！」

返事を返すとアーストロンに攻撃を続けていく。

「ここは……」

コアモジュールSSに搭乗していたはずの夢月は光の空間の中にいた。

「懐かしい光だ……もしかして君なのかい？」

目の前に青い慈しみの巨人、ウルトラマンコスモス・ルナモードが姿を現し頷いた、二人の間には輝石が光を発しながら浮かんでいた。

「久しぶりだな……夢月」

「うん……久しぶり、もう10年ぶりかな……」

目を合わせ夢月は微笑みながら会話をするが横にモニターみたいなものが現れ外の状況が映し出される。

「カオスヘッダー」

「カオスヘッダー？」とおうむ返しをしコスモスにそれが何かを問う。

「目的は判らない、だが彼等は様々な星々の生態系を変え滅ぼして

きた、私は彼等を追いこの星に」

「そうだったのか…………リドリアスはそいつらの所為で…………」

カオスリドリアスとアーストロンの戦いは激しさが増していき周囲に被害が及ぶ。

「コスモス、どうすればいい？ どうすれば僕はカオスヘッダーから地球を、怪獣達を守る？」

「それは…………君が私と一心同体となり戦う事だ」

コスモスは地球上では活動時間が3分間のため活動するには誰か地球人と一心同体になり必要な時だけ変身するしかなかった。夢月もコスモスが活動時間があるのを知っているため。

「わかった…………僕は君になる！」

リドリアスや他の怪獣、地球を守りたい、その想いは強く一心同体になるのを了承した。

「ありがとう…………夢月」

コスモスは手を差し伸べると光の粒子となり輝石の中に吸い込まれていき、輝石は花の蕾のようなカバーが付いたスティックのアイテム、コスモブラックとなり夢月の手に渡る。

「ウルトラマン……………コスモオオオオオオオオオオース！！！！！！！！」

コスモブラックを上を翳し起動させるとカバーは開き花が咲いたような形となり真ん中にめしべのようなクリスタルが露となり光を解

放した。

スーパーGUTSのガッツイーグルは到着し、カリヤが 号、コウダ、ナカジマは 号、リサは 号に搭乗しておりアーストロンに攻撃するがカオスリドリアスに牙が向いたままだった。

「あの二体を引き離さないと被害が広がるだけだわ！」
「どうしたら……！」

リサと吹雪が毒づくアーストロンとカオスリドリアスの間に光の柱が立ち引き離された。

「まさか………ウルトラマン!？」

スーパーGUTSの面々はそう感じアスカはゼレットを停車させその光に釘付けとなった。
光が消えそこに立っていたのは夢月が変身するウルトラマンコスモス・ルナモードだった。

「キャップ! アレはまさか………!!」

「コスモスだ……ウルトラマンコスモスだ！」

TPCやSRCの間では伝説の存在となっているウルトラマンコスモス、そのコスモスが現れた事により二つのチームは喜びと驚きを隠せなかった。

「シェアッ！」

コスモスは鷹のようなポーズを取り右腕を伸ばし左腕を曲げる構えを取る、後ろからはアーストロンが突撃してくるがスーパーGUTSの攻撃に阻まれる。

「お前の相手は俺達だ！」

三機が並んでアーストロンの横を通り過ぎると注意はそっちに向く。

「コスモス……まさか……」

アスカにはコスモスに変身している夢月だと分かっていた、夢月が、友達が戦っているのを見てリーフラッシャーを出す。

「俺に……戦う力があるのか？」

リーフラッシャーに語り掛けるように喋ると青く輝きだす。

「理由なんかいい、ただみんなを守りたい、アリサや、すすか達を」
輝きは強くなっていき握る力も強くなる。

「俺に友達やいろんな人達、世界を守る力が本当にあるなら、俺は

戦う！」

リーフラツシャーは起動した、クリスタルが開くと強い光を解放しアスカを包み込むと光の渦の中でウルトラマンダイナの姿、だが色がない銀色のダイナに変わり右腕を上へ伸ばし左腕を曲げどんどん巨大化すると色が着きダイナ・フラツシユタイプに変身を遂げ海鳴市の町に姿を現した。

「ショワッ！」

変身した時のポーズの後に戦う構えを取るダイナ。

「キャップ！ もう一体ウルトラマンが！」

「ティガか！？」

ダイナはティガというウルトラマンに似ているからか、間違えられる。

「アレはティガではありません日浦キャップ、ウルトラマンダイナです！」

コウダが教えるとチームEYESの面々はその名を同時に呟く。

「デアアーツ！」

ダイナは走りだしアーストロンに殴り掛かる。

コスモスは一度ダイナを見るがカオスリドリアスを助けるのが先決だと考えアーストロンを任せた。

「シェアツ！」

「ギシャアアアーツ！！！！」

カオスリドリアスは爪で切り裂こうとするがそれを腕で受け止め、
そもそもう片方の爪で攻撃されそうになるがそれを受け流すと相手
を傷付けないやり方で戦っていく。

「ハアアアア………シエアツ！」

最低限の攻撃しかせず拳ではなく手の平で押すような攻撃をしてい
きカオスリドリアスを疲れさせていく。

「ジュワツ！」

ダイナはアーストロンの横顔にパンチを食らわせてから顎にアッパ
ーを食らわしていき更にタックルで吹き飛ばす。

「デアアアーツ！」

上段回し蹴りをアーストロンの顔面に食らわすと角を掴まれ。

「ハアアアア………ジエアツ！」

右手に光を纏わせ角に手刀を叩き込み押し折る。

「ガゴオオオツ！！！！？」

アーストロンはたまらず倒れ込むとダイナは尻尾を掴みハンマー投
げのように振り回していく。

「ギシャアアアアーツ！！！！！！！！」

光線を放つがコスモスは両手を広げ光の壁ムーンライトバリアを張り光線を防ぐとバリアを押し出しカオスリドリアスにぶつけ怯ませる。

（カオスヘッダーは……………！）

コスモスは目から放つ透視光線ルナスルーアイを使いカオスリドリアスの体内に寄生するカオスヘッダーの居場所を探す。

（見つけた！）

首元にカオスヘッダーの塊を見つけるとそこを目がけ右腕を伸ばし手の平から光の粒子を光線のように放つルナエキストラクトでカオスリドリアスとカオスヘッダーを分離させる、するとリドリアスの姿に戻る。

「クエエエツ！」

リドリアスは元気な鳴き声を上げると羽根を広げ怪獣保護センターへ飛んでいった。

「ダアアアアアーツ……………！」

ダイナはアーストロンを投げ飛ばすと腕を十字に組んでソルジェント光線を放ち直撃させ倒した。

「勝ったか……………」

「まさかウルトラマンが二人も揃うとはな……………」

ウルトラマン達は近づきダイナは握手を求めた、コスモスはそれに応じるが普通の握手ではなく、一回握ると上に向けて握り手を放すと拳の前にぶつけ上、下とぶつけるものだった、コスモスはその握手をする人物を知っていたため驚きを隠せなかった。

「ショワッ！」

ダイナは先に大空へ飛び去りコスモスはその後を追うように飛び去った。

「今の握手って……！」

「アリサちゃん……まさかあのコスモスじゃないウルトラマンは………」

アリサとすずかは先ほどの握手でダイナが誰なのかを分かった。た。

そして港、そこに青い光と共に夢月が降り立った。

「僕が………ウルトラマンになるなんて………」

自分が飛んだ空を見つめながら呟くのだった。

T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
.
.
.

STAGE 05【新たな光と再会の光・後編】（後書き）

今回は防衛軍ではなくアーストロンが起こした事故に、本当にサーガ、ルナでスペシウム撃ってるようにしか…………… 号の呪いはいずれ（笑）

今回はミッド視点に戻りあのウルトラマンが！なのですが……………
今回は怪獣出ないので悪しからず。

次回予告

はやて

「え？ 新しい作戦参謀の力を試したいから六課に？」

ノゾム

「危ねえ〜ぞ〜ヴィヴィオ〜」

なのは

「スバル？」

レン

「オレはレン・ヒメヤ」

フェイト

「Prometheus Project……………」
プロメテウス・プロジェクト

次回『STAGE 06』レン・ヒメヤ プロメテウス・プロジェクト

STAGE 06「レン・ヒメヤ プロメテウス・プロジェクト」(前書き)

怪獣は本当に出ない！

今回は人間パート、出だしはこだわりを。

STAGE 06「レン・ヒメヤ プロメテウス・プロジェクト」

誰一人……オレを知らない場所に行っちゃえばオレは……自分の運命を忘れていられるはず……

そう思った、そう考えた、そう願った、そしてその願いが叶えた、オレはそこから抜け出した、
追う者は誰もいない、失敗作として見捨てたのだろう、オレは自由になれた。

そして興味があったカメラを始めて撮った写真を新聞社に売って金を稼いだ、オレが撮った写真は好評だった、真実味があると、だがそれは反管理局の人達からで管理局からは不評だった。

だけど満足してた、自分がやりたい事をやっているから好評とか不評を気にしていなかったから。

それでも……………オレは時々考える。

オレの命はどこから来たのだろうか、そしてどこに行くのだろうか
……………

「え？　新しい作戦参謀の力を試してみたいから六課に？」

ある日の機動六課、はやては本部と通信を繋げていたというよりは
相手から通信があった。

「そうだ、実験部隊なのだろう？　そのぐらい引き受けてもらわないと困る」

この前のウルトラマンゼロを守るという上層部の決定に従わなかったという件もあったため断る訳にはいかず、その作戦参謀を六課に所属する事になった。

「明日にはそちらに向かわせる、彼は優秀でね、どんな状況でも的確な作戦を組み立ててくれる」

何か引つ掛かった、その作戦参謀の作戦を上層部は聞き入れなく厄介だから六課に押し付けようとしているのではないか。

だがそれなら都合がいいかもしれない、その彼が本当に優秀な参謀ならば六課にはプラスになる、突っ込み所満載なこの部隊ならやっていけるだろうと考えた。

「わかりました、その作戦参謀を預からせて頂きます」

そして通信は切れ力が抜けたようにぐったりと背もたれの上に背中を掛け上を向くように仰向け布の天井を見る、やはり部隊長のため疲れも溜まっているのだろう。

「主、大丈夫ですか？」

「あ、シグナム、大丈夫やで、少し疲れただけやから」

シグナムが入ってきたため心配掛けまいと姿勢を正し笑顔を見せる。

「ですが……三ヶ月前のJS事件以来ほとんど休みなしで……」
「心配せんでも大丈夫やで、守護騎士の主はそんなんでへこたれ

へんよ」

腕を回していかにも元気だ！ と見せるはやて、彼女は若い、普通に考えれば一部隊を持てる若さではない、それを成し遂げた彼女は風当たりは悪いためやはりストレスは溜まるだろう。

「それより……ノゾムくんはどうや？」

「カザモリなら……雑用とか進んで手伝ってくれます、初めてやるような事はまるで子供みたいな目で説明聞いてくれます」

ノゾムはこの六課では主に雑用を担当しておりバックアップに回っている、細かい事が苦手そうな彼だが好奇心旺盛のため自ら進んでチャレンジする、解らない事は恥ずかしがるがちゃんと聞き当初あった壁は無くなっていた。

「そっか………そういえばノゾムくん、シグナムに懐いてへん？」

「ん………高町に懐いてるかと思ったのですが………」

「なのはちゃんとはあくまでも友達やでアレは、わたしの目に狂いはない！」

どこからそんな根拠がない自信に満ちた言葉が出るかわからないがなぜか説得力があった。

「何かしたんかあ？ 正直に話してみい？」

「私はただ単にスバル達が何のために訓練に励んでいるか教えただけですよ」

「ほお」と細い目をしながら抜かす。

「何か？」

「なんでもあらへんで」

ニコニコしながら答えた、はては「このまま何も言わないでそのままの方が面白い」と考えたのだ。

シグナムは頭に疑問符を浮かべずにはいられず首を傾げた。

「主、この前のグドンとツインテールとの戦いの後の事なのですが」
「ああ……その件な」

数日前のグドンとツインテールとの戦闘の後の現場で出会った少年、レン・ヒメヤの事をはやてだけに教えた、余計な混乱を避けるためだ。

「調べたんやけど……」

モニターにはそのレン・ヒメヤの写真と名前が出るが他のデータはロックされて閲覧不可能だった。

「管理局関係の人物はわかったで、せやけど名前と顔以外閲覧できへん、閲覧するにはパスワードが必要みたいなんや」

モニターを閉じて考え込むがいい案は浮かばず。

「この件はまた今度にせんか？」
「そうですね、もしかしたら再び怪獣が現れた後の現場に来るかもしれないからね」

随分と確率が低い賭けに出たが今はそれしかない、果報は寝て待て、このことわざの通りに寝るのではなく自分達は自分達の仕事をして相手から来るのを待つことに。

「もしかしたら近くにいるかもしれへんしな」
「あり得るかもしれません」

その頃、六課の敷地内に生えている木で一人の六課で保護した金髪で赤と緑のオッドアイの少女が木登りしていた、その少女の名はヴィヴィオ、JS事件の被害者とも言える彼女はなのはとフェイトを母と慕っている。

「危ねえゝぞゝヴィヴィオゝ」

ノゾムが付き添って遊んでいた。

「大丈夫だよノゾムお兄ちゃん」

心配するノゾムを余所にヴィヴィオは楽しそうに登り天辺に到着。

「ノゾムお兄ちゃん！　すごいでしょゝ！」

「ああ！　ホントすごい！」

心配しているが自分も驚いており誉める、調子に乗ったのか木の枝に足を掛けて手を放し立つという荒技を見せるのだが。

「キャッ！」

枝は折れてしまいヴィヴィオはそのまま下へ落下していく。

「ヴィヴィオ！」

ノゾムは走りだし飛び込むが。

「間に合わない！」

「キヤアアアアーツ!!!!!!!!!!」

このままでは硬い地面に叩き付けられてしまう、ヴィヴィオは目を瞑る、だがいつまで経っても痛みは感じなかった、恐る恐る目を開けるとそこには。

「スバル……お姉ちゃん？」

ニコニコして安心させようとするスバル……ではなくスバルに似た少年が笑顔でヴィヴィオを抱き抱えていた、その少年の指には『Pyr』と刻まれた指輪が嵌められていた。

ヴィヴィオは自分が登っていた木を見るとそれに顔面から激突しピクピクと動きずり落ちるノゾムが。

「ヴィヴィオ〜！」

先ほどの悲鳴を聞き付けなのはとフェイトが駆けてくる。

「あ、なのはママ〜フェイトママ〜」

ヴィヴィオは二人の下へ駆けていきなのはの足に抱き付く。

「何があつたの!?!」

「木から落ちたのを助けてもらつたの!」

木から落ちたと聞いてフェイトは慌てるがなのは至って冷静、前に視線をやると気絶してるノゾムと立ち上がり服に付いた砂を手で叩き落とす少年がいた。

「スバル？」

やはり間違えた、この少年は髪の毛を長くして三つ編みにしたスバルにしか見えないからだ。だがその違いに気付き首を振り。

「あなたは誰？」

名前を聞いてみる事にしたが。

「お前は！」

シグナムとはやても騒ぎに気付きその場にやってきた。

「あ、また会ったね。」

少年はまたニコニコする。

「レン・ヒメヤ」

「知っているんですかシグナム？」

フェイトが問い掛けると頷き数日前に現場で写真を撮影していたと教える。

「管理局の三大女神…… ホントに美人だ、ちょっと三人並んでもらえる？」

少年……レン・ヒメヤは三人を見てそう言い、三人は言われた通りなのは、はやて、フェイトの順に並ぶとレンはカメラを構えシャッターを切った。

「あざーす！」

「って………ついつい乗っちゃったけど………」

「君は誰なんや？」

はやてが聞くと。

「オレはレン・ヒメヤ、見ての通りカメラマン、色んな人を撮影したり色んな事件現場も撮影したりたまにさっきみたいに子供を助けたりする、以上自己紹介終わり！」

ニツと笑いながら自己紹介を終えるレン。

「それ以上は何も話す気はないと」

シグナムは睨みながら言う、敷地内に無断で入ってきたためもあるがこの前の言葉も気になるから警戒していた。

「そ、逆さに吊らされても話さないよ？」

これ以上聞くのを諦め何をしに来たか聞いてみる事に。

「JS事件を見事解決した機動六課の活動風景を撮影してみたくて来ました！」

「不法侵入やで」

ジト目で言うのだが仕方ない、敷地内を仕切る物は今は何も無いから入られて当たり前である。

「いいでしょ？ その子助けてあげたんだから」

したたかなのか先ほど助けたのを柵に上げると。

「ママ」

ヴィヴィオは許可してあげて〜という目で二人の母を見つめ。

「しょうがない、はやて部隊長」

「わたしも諦めるわ、いいで、許可するで」

「そうこなくちゃ！ 突っ込み所満載の部隊長さん！」

指をパチンと鳴らしながら気持ちを高ぶらせるレン。

「それ誉めてるの？」

こうしてレンの写真撮影を許可した。

「カザモリ、いつまでもそんな所で寝てないで起きろ」

レヴァンティンで突きながらノゾムを起こそうとするシグナムの姿がそこにあった。

「という訳で当分の間このレン・ヒメヤくんが私達機動六課の活動風景を撮影する事になりました」

なのはは演習場でフワード陣やヴィータにレンを紹介していた。

「よろしく！ 何か質問あるかな？」

「はい！」

質問タイムとなりいち早くスバルが手を挙げた。

「なんでレンはアタシに似ているの？」

最もだ、自分に似た人間が目の前にいる、何らかの関係があると思
い聞きたくなるのも当然だが。

「それは企業秘密！ けどもしかしたら近い内にわかるかも」

意味ありげな言葉を残しそれから数個質問ありそれは答えていくと
六課は訓練に戻りレンはその風景を撮影していく、なぜかわからな
い、だけど彼は楽しそうだった、珍しい訓練や部隊だからではなく
当たり前な事を撮影するのが。

「スゲー、これが機動六課の訓練なんだ」

シャッターを切っていくレン、そのレンを見てなのはは少し違和感
があった、やはりなぜスバルに似ているのか、なぜそんなに当たり
前のような事を大切そうに見ているかが。

「幻術！ 渋い！ 珍しい！」

ティアナが幻術と呼ばれる種類の魔法を使い分身するとレンはそう述べた。

「ギンガにも似てやがるな」

ヴィータが言うギンガとは、スバルの姉であるギンガ・ナカジマの事で戦い方はスバルと同じシューティングアーツ。

「お！ あっちは召喚師かな？」

次はキャラの戦い方を見てどんな魔法を使う魔導師なのかを見極め撮影していく、正直いつもの訓練ではなくカメラマンが写真撮影してでの活動なためやりにくかった。

「じゃあそろそろオレは」

そう思い始めていた矢先にレンは演習場を後にしフォワード陣やなのはとヴィータは力が抜けた。

「ごめんね、ヴィヴィオ助けてもらったお礼もあるから」

謝罪を入れると「いえいえ」と返ってきて再び訓練は再開された。

次にレンは人ではなく海を撮影し始めた。

「綺麗だな……こんな綺麗な海の近くにあるオフィスなんて羨ま

しいな……………」

海が好きなのか見惚れており無我夢中で海を撮影していた、まるで何かを忘れていたい、というために。

「ホント……………海は綺麗なんだから……………」

少し切なそうな表情となるがすぐに明るい表情に戻し撮影を続けた。

「彼が本当にそう言ったの？」

「ああ」

それから訓練が終わり隊長陣が部隊長室に集まっていた、シグナムがレンと出会った時に聞いた話を教えるためだ。

「クイント・ナカジマが生きてる……………本当に信じられるのかシグナム？」

「恐らく……………間違いはないだろう」

自信があつた、彼は嘘を吐いていないと。

「理由はレン・ヒメヤがスバルに似ている事だ、それから考えられるのはただ一つ」

「人造……魔導師……」

人造魔導師とは人の手で細胞を変化させ生み出す人間、クローンとかそう言った類いである。

つまりレン・ヒメヤはスバルの母親、クイント・ナカジマのクローンである可能性がある、スバルもそうであるように。

「だがそれを言っても彼、何も言わないと思う、ちょっと違和感があるから」

「なのはもか、アタシもだ」

なのはとヴィータは訓練中ほとんど近くいたためレンから感じる違和感に気付いていた。

「後はこれや」

モニターにはやてが調べて管理局のデータベースから出てきたレンのデータが表示され。

「端にグループPPと書かれてるやろ？　それが何かわからんのや」

そしてパスワードを入力する入力欄、そこに何か入力すれば解除できるはずではやても色々入力したが解除できなかった。

「みんな、何かレンくん気付いたことあらへん」

その言葉に考え込むとなのはが。

「そう言えば指輪に『Pyr』って刻まれたけど……………」

今はなんでもいいから手掛かりが欲しい、その手掛かりにしがみ付いて『Pyr』と入力した、するとそれがパスワードらしく解除されグループPPの詳しい情報が閲覧できた。

「プロメテウス・プロジェクト？」

プロメテウス・プロジェクト

『Prometheus Project』と記載されたページ、グループPPは訳したものだっただ、もっと深く調べようとしたがそれにはグループPPに関わる局員のIDがないと見れなかったが内容は少しだけ書かれていた。

「これはクローン技術を使用し新たな魔導師を生み出すための計画……………優秀な魔導師や指揮官の遺伝子情報を組み合わせる誕生させる、その計画で誕生した子供らをプロメテの子と称する」

はやてが代表として説明文を読んでいくが責任者の名前や局員のメンバーのデータはやはりIDがないと見れないためこれ以上はグループPPの事は調べられないと断念した、だがそのプロメテの子らの顔写真と名前は載っていた。

「なんてサービスが傾いてるページなんや、そのプロメテの子らの情報だけは見れるで」

プロメテの子達の顔写真を見てみるとその中にレンの写真が、やはり彼も遺伝子の組み換えで生まれた人造魔導師のようだった。

「彼、ルーテシアに似てない？」

フェイトが目にしたのは紫の長い髪の毛の少年の写真だった、名前は『ユウ・キラサワ』というらしい。

ルーテシアとはJS事件でジェイル・スカリエッティ側だった魔導師である。

「色んな魔導師の遺伝子つこうてるみたいやな」

これ以上は何もわからないだろうとこのページをマークしモニターを閉じた。

「だけどレンくん、これを突き付けても何も話さないと思うわ」
「シヤマルに同意見だな」

レンの態度から見て何も教えてはくれない、そう考え時が経ってから話を聞こうとなのは達は決めたのだった。

その頃レンは借りているアパートの部屋にいた、そこで何かの器具を腕に巻き付くそれに出される数値を見ると深いため息を吐き膝に肘を付き自分が撮影した写真を見ていく、どれも人ばかりで今回写した訓練中の六課の面子のも入っていた。

だが、私達はその時まで知らなかった、なぜレンは管理局から抜けたのか、その理由である運命を知る時、私達は苦悩するなんてまだ知る由もなかった。

T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
.
.
.

STAGE 06「レン・ヒメヤ プロメテウス・プロジェクト」(後書き)

怪獣出ませんでしたでしょ？後の二話はネクサスパートで行き次はダイナ・コスモスパートという感じで。

次回予告

ユウ

「本日付で機動六課に所属となりました作戦参謀を勤めさせてもらう事になりましたユウ・キラサワです」

レン

「ここが初めてウルトラマンが姿を見せた場所……………」

はやて

「こりゃ実力本物やな」

グランテラ

「ギシャアアアアーツ!!!!!!!!!!」

ヴィータ

「ギガントシュラアアアアアアーク!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

レン

「そんじゃ……………行きましょっか!」

次回『STAGE 07 予兆 プロフェシー』
『

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8351y/>

ウルトラマンサーガ LYRICAL

2011年11月30日20時57分発行